



テロル・イン・パープル

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

黎明の章

隠者の章

至福の章

変化の章

淫夢の章

修羅の章

転生の章

★タップすれば各章へジャンプします

黎明れいめいの章

水面に映った山肌が、夏の間の深緑から、気のぬけたライムソーダのような色に変わってきている。山の

樹々が色づき始めている証拠だ。

バルコニーを吹き抜ける朝の風も、肌寒い。ましてや、透けて見えるほど薄いネグリジェでは、なおさらだった。

女は、眼下の水を見つめている。

うつすらと朝霧が漂い、さざなみが立っているその水面を、土地の者は、龍神湖と呼ぶ。たしかに広さだけから見れば湖のようだが、じつは明治時代に掘られ

た灌漑用の溜め池だという話だ。

山と森に囲まれたその池のへりに建てられた、瀟しょう

洒しゃな白い洋館。池側の二階が張り出すような形で、バルコニーがしつらえてある。水面から垂直に突き出た四本の円柱形の柱に支えられたその広いバルコニーの手すりに両肘をついて、女は立っていた。

山の端に顔をのぞかせたばかりで、ほぼ水平に射し込んでくる太陽光線に、淡いピンクのネグリジェの中

の肌が、くつきりと輪郭を見せながら、ほの白く輝いている。

小柄で細い肩。それでいて、豊満な生命感をたたえた乳房。くびれたウエストと、ほどよい丸みを帯びたヒップ。すらりとのびた脚。

それは、ヴィーナスの生まれ変わりかと見まごうほどに、「女」というものの理想的な造形だと言ってよかった。

顔もまたしかり。黒目がちの大きな瞳。適度なほりの深さに、鼻筋が通り、小鼻はかわいらしく盛り上がっている。

小さなバラの花びらのような唇と、そして淡い赤みをおびた頬に、時折、肩のあたりまで伸びた柔らかい髪がいく筋か降りてくる。女は薬指で、それをしどけなくかきあげる。

女の印象をひとことで言うなら、現実的ではない存

在、というのがいちばん適当だろう。無表情がかえってあどけなく見える顔と、小柄ながら均整のとれた体が、なにかできすぎた印象を与えている。言ってみれば、まるで、精巧に作られた鑑人形のようなのだ。

女は水面を見つめたまま、朝の空気を深く吸い込んだ。

「聖子、起きてたの？」

振り向くと、楡の木でフローリングされたバルコニ

ーの床の上に、もうひとりの女が立っていた。

こちらはまた、聖子と呼ばれた女とは正反対の意味での美人だった。

彼女より十五センチ以上はある長身。腰まで伸びたストレートの黒髪。知的に整った顔だち。大きくてすこし張った感じの肩の線、豊かなバスト。にもかかわらず、シェープアップされた肢体。グレーのスエツトスーツの上からでも、成熟した肉体と、その中に秘め

た意志的な「剛^{つよ}さ」が見てとれた。

「あ：：ねえさま、あたしが起こしてしまったの？」

朝日がまぶしそうに、聖子が聞いた。

「ううん。そうじゃない。おまえが私のもとからいなくなつた夢を見て、目がさめてしまったの」

「あたし、もうどこへも行かない。ずっとねえさまといっしょ」

聖子は、ハスキーな声で言つて、ふたたび池の水面

に目を戻した。

と、長身の女は、聖子の後ろにそっと近づき、両側から腕をまわして、その体を抱きすくめた。

聖子はあたかもそれを予測していたかのように、ちよつと体をそらし、長身の女にもたれかかる。聖子の体は、女の胸の中にすっぽりと包まれるような形になった。

「聖子……」

女が、聖子の耳元に口をつけて言う。

「……むかしのこと、考えていたんでしょ？」

「……」

聖子はかすかに首を横に振った。

女の手が、ネグリジェの上から聖子の胸に触れる。

そして、優しくその乳房の輪郭をたどる。

「……」

聖子は女に身をあずけたまま、自分の肩に頬をすり

つけるようにして、吐息をもらした。

「しあわせかい？」

女は聖子の胸を撫でまわしながら聞いた。

「……わからないわ」

「……ん？」

女はその答えが心外だとしても言うように表情を曇らせ、手の動きをとめた。

「あたし、生まれてからずっとしあわせだったことな

んでないもの。：：でも：：ねえさまにこうされてる
と：：生まれる前のしあわせだったときのこと、思い
出せそう」

女は、また乳房にあてた手を動かし始め、聖子のふ
つくらとした耳たぶを咬んだ。そして同時に、もう一
方の手を、聖子の下腹部へとのばした。

「：：ああ」

聖子は、幼女がいやいやをするように小さく体をゆ

すったが、そのくせ目を閉じて、女のなすがままにまかせた。

女の手が聖子の秘部をまさぐる。そして、唇は首筋から頬へと這い、聖子の紅い唇をとらえる。

朝日が、くちづけするふたりの影を、池のさざなみの上へと投げかけていた。

「さあ、部屋へ戻ろう」

唇をはなすと女は言った。

「おまえは私の宝物。私がつくった最高の芸術品。風邪なんかひかれたら困るからね」

そう言いながらも、女の手は、聖子の股間をさらに刺激的に這った。聖子の吐息は、だんだんにあらくな
っていった。

：：：：：。

朝の透明な空気の中、女どうしの戯れは、詩人サツ
フォーと年若い侍女とのそれのようだった。しかし、

この、現代日本の、東京にほど近い森の中にある「レスボス島」には、それ以上に、想像を絶するほどねじくれた秘密が隠されているのだった。

今、女の腕の中で身をくねらせる十代の少女のような聖子の実年齢が、じつは二五歳であること。さらには、聖子の正体が、警察が血まなこになって捜している凶悪犯であること。そして、先刻から女の手がまさがっている聖子のその部分には、すこし前まで、あり

うべからざる「もの」が存在したということ……。それらの秘密を知っている者は、今ではもう、この世にこのふたりしかいなくなってしまった。

一年半前。

勅使河原聖一は、同志である 冷泉毅、平林ひろみ

の二人と秩父山系の奥深い森の中をさまよっていた。

東京側から入ったのだが、すでに県境を越え、埼玉

か山梨にいるのかも知れない。人家を避け、雪の残る
けもの道ばかりを選んで歩きつづけてきたのだ。

その結果、三日間、三人とも何も食べてはいない。

もう精神的にも肉体的にも限界に達していた。おまけ
に、今朝からは、冷たい雨が降りつづいている。

手持ちの携帯ラジオのニュースによれば、聖一と冷
泉は、すでに指名手配されていた。奥多摩山中に逃げ
込んだことも報じられている。うかつに山を降りるわ

けにもいかなかった。

「俺が麓におりて、大乘寺さんたちに連絡をとってみる。救援を頼んで、逃走ルートを確保してもらおう」

大木のウロに身を寄せあつて、先刻からうとうとし
ている冷泉とひろみに向かい、聖一が言った。

冷泉はその言葉に、目をあけた。

「危険だ。おまえは官憲に顔を知られすぎてる」

「このまま野たれ死ぬよりいいだろう。……しかし、

なんでこんなことになったのか……」

聖一は少しイライラした様子を見せながらため息をついた。

「彼女を責めるのはやめろよ。少なくとも当初の革命的目標は果たしたんだ」

冷泉は、聖一の言葉の先まわりをしてひろみをかばった。ひろみは聞いているのかいないのか、冷泉の肩に頭をのせて目を閉じたままだった。

アラブ諸国と戦争状態にあるA国の外務大臣ウリ・ベンシヤウルが、公賓として来日するというニュースは、昨年暮れからつかんでいた。二ヶ月前には、国内でのスケジュールや、宿泊先まで、細かい情報を入手した。

アラブゲリラに連帯する極左の超過激派組織「世界同時革命軍日本支部」の責任者、大乘寺有弘は、ベン

シヤウルに対する報復制裁の方針を決定し、その工作員として、組織の中では比較的経験の浅い聖一と冷泉を指名した。聖一は、この間の果敢なゲリラ活動の成果を評価されての指名だし、冷泉は爆発物専門家としての起用だった。

検討の結果、決行場所はベンシヤウルが泊まるホテルと決定された。

同時に、ひろみがアルバイトのメイドとしてホテル

に送り込まれた。彼女は冷泉の学生時代からの恋人で、その関係で組織に加わってきた女だ。理論水準は低いものの、まだ官憲のリストに載っていない有利さがかわれたのだ。

ひろみが、まじめなルームメイドとして勤めている間、聖一と冷泉は、爆弾を作っていた。小型の圧力釜に黒色火薬を詰め、クォーツ式の時限起爆装置を仕組んだものだ。トラック一台くらいはゆうに吹き飛ばす

だけの破壊力を持っている。

準備がすべて整い、ベンシヤウルが来日した翌早朝。ひろみの手引きで、リネン係を装った聖一と冷泉は、爆弾を隠し持ったままホテルに潜入した。

S Pや私服警官が張っている宿泊客用の廊下を避け、従業員通路を使ってスイートルームの寝室のちようど裏側にあたる備品倉庫に忍び込んだ二人は、そこに爆弾を仕掛けていた。

その最中だった。通路に見張りに立たせていたひろみが、SPらしき男に尋問を受けている声が聞こえてきた。事前のひろみからの報告によれば、従業員通路にSPは入ってこないはずだ。これはひろみの調査ミスか、あるいは、彼女の行動が何らかの不審を招いて、チェックされていたにちがいがなかった。いずれにしてもひろみのミスだ。

さらに、緊張しているひろみは、SPに対して明ら

かに不自然な対応をしていた。聖一と冷泉は作業を中断し、物陰に隠れて身構えた。冷泉は、不測の事態のために用意してきた手製の手榴弾をポケットから出した。

案の定、不審に思ったらしいSPは、倉庫のドアをいきなりあけた。その手には拳銃が握られている。

冷泉が備品棚の陰から、ピンを抜いた手榴弾を、SPに向かって投げつけた。一瞬の後、それが炸裂した。

たじろいだS Pが退いた隙に、二人は出口へと突進した。その際、聖一は、冷泉から手渡されたもうひとつの手榴弾の信管を抜き、爆弾のそばへ置いた。

二人が通路へ出て、ひろみを抱えるようにして走り出したとき、倉庫の中から小さな炸裂音が、つづいて、巨大な爆音が響いた。

混乱するホテルの中を走り抜け、裏口に用意してあったライトバンに乗り込むまで、さまざまな人間に目

撃された。

都内に緊急手配された検問でも、何度か危うい目に合い、途中、何台ものパトカーの追跡をかわしながら、奥多摩方面へと追い込まれ、車を捨てて、山中に逃げ込んだというわけだ。

ここまで逃げのびたのが、いわば奇跡と言ってよかった。

しかし、手はずどおりマスコミに送りつけられた「犯

行声明」により、セクトのリストから、逮捕歴のある聖一と冷泉はすぐに指名手配されてしまった。本来なら、时限装置で、爆発時には逃走が完了していたはずだったのだ。

ニュースによれば、ベンシャウルは重傷を追い、危篤状態だという。テロの目的を達したことはまちがいにあったが、自分たちがこんな目に合うはめに陥った

のは、ひろみのせいだった。

（だから、作戦に女を加えるのに、俺は反対したんだ）
聖一は、冷酷さがただよう一重瞼の目で、ひろみを
見やっていた。

「……雨が上がったようだな」

冷泉が言った。

「俺たちが降りるよ」

「ん？　彼女と二人でか」

「ああ、まだ俺のがおまえよりメンはわれてない。それに、もし俺がパクられても、彼女が本部と連絡をつけられるかも知れない」

けつきよく、冷泉とひろみが山を降りた。アジトに連絡さえつければ、二・三日うちには同志たちが、何らかの手を打ってくれるはずだ。聖一としては、それに希望をつないで、待つしかない。

とはいえ、生きていくためには、なんとか空腹をいやす必要があつた。夜の寒さに耐えるだけでも、もう体力は限界なのだ。しかし、まだそこかしこに雪の残る山中で、食料が見つかるはずもない。

昼近くになって、聖一は、隠れていたウロから出て、行動を開始した。

もとの場所に戻れるように、手持ちのナイフで樹皮に目印をつけながら、二時間ほど歩いた頃だろうか。

聖一は、一本の林道に出た。

それは奇妙な感じの道だった。まわりはうつそうとした原生林であるにもかかわらず、その路面には、大きさをそろえた砂利がきれいに敷き詰められ、雪も、道の両側にかき分けられていた。おかしいのはそれだけではない。これだけの道をつくるなら、もっと森を切り開いてもよさそうなものなのに、なにか道自体を巧妙に隠してでもいるように、両側から森が被いかぶ

さる形になっている。上空にヘリの音を聞いて、仰ぎ見た聖一にも、ヘリどころか、空さえ見えないほどなのだ。

聖一は身の危険を感じながらも、一方でこの薄暗い林道に興味を引かれた。それは、ゲリラのカンと言ってもいいようなものだった。聖一は、用心しながら、林道を登って行った。

十五分くらい歩くと、突然、目の前が開けた。

そこには芝生が敷かれた広場があり、その向こうに大きな池があつた。そして、その池の手前に、二階建ての百坪はあると思われる白いビルが建っていた。さらに、ビルの脇には、数台の高級車が停まる駐車場すらある。

と、建物の窓に人の動く気配がした。聖一は、身を翻して森の中に隠れた。

聖一は注意深く建物の方を観察しながら、広場をま

わりこむ形で、じりじりと森の中を移動する。

窓に見えた人影は、白衣を着ていたようだ。それで、最初聖一は、そこを、どこかの企業の秘密の研究所かとも想像した。しかし、その女性らしい人影の頭に、特徴ある白い帽子が載っていたのに気づき、病院であることに思い至った。あれは看護婦なのだ。

だが、病院だとするとおかしな点がいくつもあった。だいいちに、病院ならどこにもありそうな看板の類が

まったくない。玄関らしい入り口も、目立たない両開きのドアがあるだけなのだ。さらに、人影が見えた一階の一部を除くと、窓がいつさいないのだ。病室に窓のない病院など、考えられない。

特殊なサナトリウムのようなものか、それとも精神病院か……

聖一は、考えをめぐらせながら、森の中を、病院の脇へとまわりこんだ。

と、広場の入り口のところからは見えなかったもうひとつの建物が、病院の裏側に現れた。

池に張り出すように建てられた洋館。壁の色は、病院の棟とおなじ白なのだが、こちらはビルではなく、屋敷だ。入り口のドアから病院の裏口に向かって、敷石の道がついている。おそらくはこの病院の経営者の住居なのだろう。

あそこへ忍び込めば、食べ物にありつけるはずだ。

聖一は、そう考えながらも、森の中で辛抱強く待った。今はまだ、動くには明るすぎた。

聖一は、ジャンバーのポケットに入れたラジオにイヤホンをつけ、それを耳にあてがうと、スイッチを入れた。

と、聖一の耳に、いきなりビッグニュースが飛び込んできた。入院中のベンシヤウルが、息をひきとったというのだ。これで、聖一たちのテロは完全に成功し

たことになる。

ラジオは続けて「日本政府の威信にかけて犯人を逮捕する」という官房長官声明を伝え、秩父山系全域に大規模な山狩りが行われていることを告げた。

先刻のヘリはその一環にちがいない。

さらにラジオは、犯人逮捕への協力の訴えと、聖一たちの特徴を報じた。

「主犯は勅使河原聖一、二四歳。身長一五四センチ：

：「

聖一は、そこまで聞くと、乱暴にラジオのスイッチをきった。

聖一が国内で最も過激だと言われる新左翼組織「世界同時革命軍」に身を投じたのは、本人が認識しているほどイデオロギッシュな理由からではない。

聖一は、地方都市のごくふつうのサラリーマンの家

に生まれた。ひとりっ子として母から多少あまやかさ
れたところはあるものの、学校の成績も良く、大学ま
では優等生コースをたどった。

しかし、聖一には中学時代から持ち続けている強い
コンプレックスがあった。身長である。もともと背が
低かった上に、中学二年で伸びがぱたりと停まった。
一五四センチという身長は、最近の若者の中にあつて
は、異常と言つていいほどだ。しかも、痩せている。

小学生の頃はさほどでもなかったが、中学に入った頃から、そのことからかわれることが多くなった。

毎年、クラスメートからかならず「チビ」というあだ名をつけられた。優等生ということもあり、決定的ないじめにはあわなかったものの、クラスの中ではつねにからかわれ疎んじられる存在だった。

当然、聖一の性格は鬱屈していった。その表情からは、いつしか笑いが消え、厚ぼったい一重瞼の顔は、

無表情で冷たいものになっていった。思春期なら誰でも経験する恋愛も、そのチャンスさえないまま通り過ぎてしまった。

聖一は、だんだん、そんな自分自身から逃げ出したいと思うようになった。両親の反対を押し切って、東京の大学に進学したのも、知った者がいない地でなら、これまでの自分を捨てて、やり直せるのではないかと考えたからだ。

しかし、大学での生活も大同小異だった。聖一は奇異な目で見られる存在であれこそすれ、「キャンパスの人気者」にはけっしてなれなかったのだ。

そんなある日、学内で見かけたポスターになんとはなしに惹かれて、アラブゲリラの闘争を描いたという記録映画の上映会に顔を出した。

上映の後の討論会で、聖一は、「ちっぽけな組織が近代兵器を装備した大国と戦う姿に感動した」という

ような感想を述べた。それは多分に、その場の雰囲気
に気圧されての発言だったのだが、上映会の主催者は、
帰ろうとする聖一を誘い、とあるアパートへと連れ込
んだ。そこで、大乗寺と会った。

大乗寺は、アラブ問題の本質について、そして、ア
ラブを発火点とする世界革命の展望について熱っぽく
語った。

その内容のほとんどは、当時の聖一に理解できるも

のではなかったが、聖一は妙に感動した。なにより、大乘寺が、聖一のことを一人前の男として扱ってくれたことがうれしかったのだ。

そのアパート——そこは、指名手配中の大乘寺のアジトだったのだが——へ、聖一は足繁く通うようになる。

やがて、大乘寺は、聖一に組織に加わるように勧め、聖一はそれに応えた。大学へはほとんど顔を出さなく

なり、富山県の山中にあるアジトでの武闘訓練などに、たびたび参加した。そして、商社などへの爆弾テロ、電話ケーブルの切断、新空港反対闘争など、大乘寺の命に従って、数多くの作戦に参加した。

途中、逮捕され、裁判も含め、一年の空白はあったものの、聖一は、平均年齢の上がった組織内にあって、若手の有望株にのし上がっていった。

聖一のテロリストとしての優秀さは、身軽な身体的

特長を活かした敏捷性と、無差別テロの任務にも耐え得るだけの神経の強靱さにあつた。女子供が出入りする場所さえ、何の躊躇もなく爆破できた。

聖一自身は、今ではそれを、自分の思想の強固さの証左だと考えているようだが、じつは、自分をないがしろにしてきた世間に対する復讐という面も、まちがいにいくあるのだ。だから、聖一は、自分の犯行がマスコミに大きく報じられれば報じられるほど、自分の存

在そのものが大きくなっていくような喜びを感じているのだ。

聖一は、五時間近く、その場所にじっとして、屋敷の中をうかがっていた。そして、そこが無人であると確信した。

時刻はとうに夕刻を過ぎ、あたりは暗闇の底に沈んでいたし、窓のない病院棟からは、ほとんど光は漏れ

てこない。忍び込むには絶好の機会だった。

森を出た聖一は、身を低くしながら、屋敷へ走った。

風で触れあう樹々の音以外は、何も聞こえない。気配をうかがいながら、入り口のドアへと近づく。

意外なことに、ドアに鍵はかかっていなかった。聖

一は、ためらうことなく、そのドアから屋内へ入った。

長時間森の中にいたせいで、体は冷えきっていたが、

そのぶん、暗闇でも目がなれていて、室内の様子がよ

くわかった。玄関ドアから、五メートルほど廊下がつづき、そのつきあたりに、オープンリビングがある。

廊下の両わきには、ふたつのドアと、二階への階段があった。聖一は、靴のまま廊下を進み、リビングルームへと入って行った。ガラス戸の向こうに、池の水面が微かな光に揺れているのがわかった。思ったとおり、キッチンは、リビングの脇から入れるようになっていた。

キッチンに入った聖一は、すぐさま、冷蔵庫のドアをあけた。冷蔵庫の照明が、室内をほの白く浮かび上がらせた。

そこには、豊富な食料品が貯蔵されていた。聖一は、自分の腕ほどもあるプレスハムを取り出すと、ナイフで皮を切り裂き、むしゃぶりついた。獣のようにガツガツとハム一本を食い終わると、次は缶詰にとりかかった。プルトップの缶詰はすべて、蟹やキャビアなど

の高級品ばかりだ。聖一は、缶に直接口をつけ、すす
るように食った。

その時だった。玄関のドアが開く音がした。そして、
廊下の灯が点いた。

聖一は反射的に、ひとつだけある窓に向かい、音が
しないようにそこをあけた。さっき隠れていた森側の
窓だ。ここを出て森の中へ逃げればいい。

そこまでは聖一も冷静だった。しかし、次の瞬間、

聖一が予測しなかったもうひとつの事態が起きた。窓を開けたとたん、目の前の森がさっと明るくなったのだ。それは一瞬だったが、その一瞬、出ようとした聖一は躊躇ちゆうちゆうした。つづけて病院の脇の駐車場に二・三台の車が停まる音が聞こえた。森を照らした灯は、ヘッドライトだった。

もう遅かった。外へ出れば、車から降りた人間に目撃される。室内を背後から迫る人間の足音は、廊下か

らリビングの方へと進んでくる。行き場を失った聖一は、冷蔵庫の陰に身を潜めた。

リビングの照明が点いた。そして、足音——どうやらひとりのような——は、キッチンへと向かってきた。キッチンの灯がともった瞬間、その足音がとまり、息をのむ気配が感じられた。冷蔵庫の前に食い散らかしたハムの皮や缶を見つけたのだ。

「……誰か……いるの？」

女だった。

聖一は、冷蔵庫の陰で、ナイフを握りしめて、身構えた。女は、警戒しながらも冷蔵庫のそばへ近寄った。

「声を出すな」

女がじゅうぶんに近づいたところを見はからって、躍り出た聖一は、ナイフの切っ先を女の胸元に向けて言った。

女は息をつめて、立ちすくんだ。

「叫んだら命はないぞ」

眼光鋭くにらみつける聖一に、女は唾を飲み込むようにして、うなずいた。

そのままの体勢で、にらみ合いがしばらくつづいた。女は白衣を着ていた。表の病院の医者にちがいない。聖一は、女をにらみながら、次の行動に思いをめぐらせていた。しかし、やがて、今置かれている二人の立場の不自然さに気がつかざるを得なかった。聖一

は、先刻から、女の顔を見上げていた。女の身長は、一七〇センチ以上はあったのだ。

客観的に見れば、どう考えても奇妙な凶だ。青ざめた色白の小男が、大女を相手にナイフを突きつけている。

最初、恐怖に顔を引きつらせていた女も、そのことに気づいたようだった。

「あなた……爆弾犯人ね」

女は冷静さを取り戻した声で言った。聖一には、その時、女が口の端で笑ったように見えた。

「うるせい」

次の瞬間、聖一は逆上していた。

俺を馬鹿にした奴はこうしてやる！

聖一は、女をその場に押し倒した。馬乗りになり、ナイフを女の頬に押しつけながら、その白衣に手をかけ、引き裂いた。女は激しく抵抗して、手足をばたつ

かせた。聖一より大きな女が、体をひねりながら膝を突き上げたせいで、聖一は飛ばされ、ダイニングテーブルの脚に背中を打ちつけた。

それが、聖一の神経をさらに逆なでした。立ち上がりリビングへと逃げる女に、背後から飛びかかり、引き倒す。

おおいかぶさった聖一の下から、逃げようともがく女が、また体をひねる。その瞬間、聖一の拳が女の顎

を打った。

女は、その一撃で、気を失った。

聖一は、白衣の下の女のブラウスをナイフで切り裂いた。さらに、スリップとブラジャーをも。ナイフの刃が、乳房に触れ、白い肌の上に一筋赤い血が流れた。

聖一は、女のスカートをたくしあげ、ショーツをひきはずした。そして、女の脚を押しひろげると、いきり立つ自分のものを出し、いきなり、女の内腿のあわ

せ目へ、それを突き立てた。

「うっ……」

その痛みに、女が再び目を覚ました。

聖一は、女の口を手で抑え、腰に力を込めて、何度も女を突いた。

「ちくしょう、ちくしょう……」

女は聖一をにらみつけて抵抗したが、それが哀願の眼差しへと変わり、やがて観念したようにおとなしく

なつた。

女の瞳から、涙があふれた。

聖一は、さらに激しく責めたて、荒い息の中で、終局を迎えた。

最後の一撃に、女は顔を歪めてのけぞった。

その時だった。リビングテーブルの上の電話が鳴った。

攻撃的な興奮が急激に冷め、聖一の力がゆるんだ隙

に、女は聖一の下からすり抜け立ち上がろうとした。

「馬鹿野郎。出るな」

テーブルの電話に手をのばした女をふたたびつかまえ、聖一は言った。

「……この音は、病院からの内線電話よ。出なければ怪しまれるわ」

女は意外に冷静な声で応じた。

聖一は、女を見つめた。またしばらく、二人のら

み合いがつづいた。

「よし、モニターにして出る。余分なことは言うな。殺すぞ」

聖一も、冷静さを取り戻して、冷酷な声で言った。

女は聖一にナイフを突きつけられたままの体勢で、電話機のモニターボタンを押した。

「……はい。なに？」

「あ、院長先生、どうかされたんですか？」

電話機から、若い女の声が聞こえた。

「え、どうして？」

「お出になるのが遅かったから……」

「ちよつと調べものをしに戻ったんだけど、つい、医学書を読みふけてしまつて。……何の用事？」

「あ、ええ。今、警察の方がいらして、……ちよつとかわりますから……」

聖一は、緊張した。

「もしもし、私、警視庁公安課の大河内と申します」
聖一もよく知っている刑事の声だ。

「はい、何でしょう？」

「じつは、爆弾犯人の一人がこの付近に潜んでいる形跡があるもんですから、こちらにお尋ねしたわけです」
「て」

「はあ、それは恐ろしいことですわね」

女は平静に演技していた。

「よろしかったら、病院の中を調べさせていただきたいと思ひまして……。でも、事務長さんがダメだとおっしゃるんですよ」

「ええ。事務長の申すとおり、それは困りますわ。うちに入院されてる患者さんは、社会的に地位のある方ばかりですの。ご迷惑をおかけするわけにいきませんもの」

「いや、患者さんに迷惑をかけるようなことは……」

「とにかく、お断りします」

「よわったな……。わかりました。令状があるわけじやなし、あきらめます。ところで、先生のお宅のほうは大丈夫ですか。よろしかったら、そちらにまわりますが」

聖一は女の喉元にあてたナイフに力を込めた。

「いえ、けっこうです。とにかく、患者さんのご迷惑になりますから、あまり騒ぎ立てないでください。警

備については私どもの方で、じゅうぶん注意いたしますから」

「そうですか。しかたありませんな。しかし、しばらくの間、この付近を見張らせてもらいますよ」

「それも、あまりうれしくありませんが、当院の敷地外のことについては、あれこれ言うわけにいきませんものね。もし、犯人を見かけましたら、すぐにでも連絡いたしますから」

女はそう言つて、モニターを切った。

そして、聖一を見つめ、言つた。

「あなた、とうぶん、ここに隠れているしかないよう
ね」

隠^{いん}者^{じゃ}の章

目を開けると「白」の中にいた。

天井も壁もすべて白い内材でできている。あまり大

きな部屋ではないのだが、その白がベッドの中の聖一の距離感を狂わせ、果てしない空間の中に浮かんでい
るような感覚にさせた。眠りから覚めても、まだ夢の
中のようなのだ。

今は、何時だ？

カーテンの向こうが明るいから、夜でないことだけは確かだ。しかし、レース越しの早春の曇り空は、太陽の高さをわからなくさせている。自分がどのくらい

寝ていたのか、その感覚も曖昧だ。昨夜、久方ぶりに入浴して、ちゃんとした夜具で寝た。そのせいでよほど眠りが深かったにちがいない。

聖一は、ベッドから身を起こそうとした。

ところが、体はその柔らかな布団に沈みこんで、動こうとしない。室内は心地よい温度に調節されていたから、聖一は薄手の羽毛布団一枚で寝ている。その軽いはずの布団が、体にのしかかってくる。寝間着代わ

りに、この家の女から借りた大きめのスエットスーツが、汗でぐっしより濡れている。そのうえ、体じゅうが、だるかった。

いったい、俺はどうしたというんだ？

聖一は、起きようと努力するのをやめ、なんだか朦朧としている頭で、昨夜からのことを反芻した。

「あなた、とうぶん、ここに隠れているしかないよう

ね」

表の病院を捜査に来た刑事と内線電話で話した後、女はそう言ったのだ。

その口調は、冷静で、ビジネスライクと言ってもいいようなものだった。

聖一は、その様子を見て、はじめて、この女はただ者ではないと感じていた。

女が着ている白衣は、破れてボタンがとび、その下

のブラウスやブラジャーはずたずたに切り裂かれている。そこからのぞいた右の乳房には、ナイフが触れた傷があり、白い肌に血さえ流れている。さらに目を下に転ずると、しわくちやになったスカートの下の内腿を、秘部からこぼれ出た精液がつたっている。その精液は、言うまでもなく、目の前でナイフを突きつける聖一のものなのだ。

警察から追われる凶悪犯に、数分前に暴力的に犯さ

れ、なお、こんな毅然とした物言いのできる女。肝つ玉がすわっているのか、狂っているのか。少なくとも「普通の女」でないことだけは確かだった。

「かくまってくれるっていうのか」

聖一は、ナイフを下に降ろし、しかし、いつでも飛びかかれる体勢のままと言った。

「そうね。あなたなんかを、かくまいたくはないけれど」

「信じられん話だな」

「信じようと信じまいと、疫病神は来てしまったのよ」

「俺のことか」

「他に、誰かいて？」

聖一は、鼻で笑って、後ろにあったソファにどつか
と腰をおろした。

女は、そんな聖一に一瞥をくれると、その場から一
歩踏みだした。

「どこへ行く」

聖一はソファから身を起こして、厳しい声で聞いた。
だした。

「ガウンぐらいは着させてよ」

女は、すこし離れたスツールの上に脱ぎ捨てたまま
になっていたナイトガウンを視線で示しながら言っ
た。

聖一がふたたたびソファに身を沈めると、女は破れた

白衣を脱ぎ、ガウンをとって上からはおった。そして、そのスツールに、聖一に背を向けるかたちで腰掛けた。「後ろを向くな」

女はサイドテーブルの上にあったティッシュペーパーの箱を取りながら、顔も向けずに答えた。

「あなたの前で、もう一度股を開くなんて、ごめんだわ」

女がティッシュで、内腿を拭くのを見て、聖一はま

た鼻で笑った。

下の処理が終わると、女は、ガウンの前をはだけて胸の血を拭いているようだった。そして、衿を合わせ、聖一の方に向きを変えて、座りなおした。

「しばらくかくまってあげるから、約束してもらいたいの」

「なんだ」

「二度と私の体に触れないって」

「ふふ：：そんなことは、わからんな。俺は男だ」

聖一はナイフをもてあそびながら、一重瞼の目を上目遣いにして言った。

「もし、またあんなことをしたらすぐに警察に通報するわ。A国の外相を殺した爆弾犯人がここにいますってね。あなた、名前は勅使河原^{てしがわら}なんとかって言ったわね。毎日、テレビに顔写真が出てるわ。電話一本で、数秒後にはさっきの刑事がとんでくるでしょうね」

「ふふ……できるもんか」

「どうしてそんなことが言えるの」

「あんとと、ここの病院には警察に知られたくない事情があるんだろ」

「馬鹿ね。そんなものないわ」

「じゃあ、なんであんなに刑事が立ち入るのを嫌がったんだ」

「騒がれなくなっただけよ。病院の存在を人に知ら

れたくないから」

「そらみる。世間に言えないようなことをやってるわけだ」

「そうじゃないわ。病院はちゃんと認可を受けてるし、私だって医師会のメンバーよ。うちに隠さなければいけない事情があるわけじゃない。あるのは患者さんの側よ」

「どういうことだ」

「うちは形成外科なの。それも世間で言うところの美容整形が専門。そしてクランケは主に芸能関係者。いちばん多いのはデビューしたてのアイドルよ」

「ふ：：なるほどな。つまり、ブスや醜男たちが、ここで密にかわいこちゃんに変身するってわけか。人里離れたスターの製造工場ってわけだ。けっ、ふやけたブルジョワ社会にはありそうな話だぜ」

「もし、あなたがここで発見されてご覧なさい。マス

コミが大挙して押し掛けてくるわ。そしたら、この病院のことも当然、洗いざらい調べられることになる」

「わかったぜ。俺にはいてほしくないが、だからといって追い出すわけにはいかない。外には刑事が張ってるからな。俺はどうしようもない疫病神ってわけだ。しかし、そんならなおのこと、俺はここで好き放題できるってもんだ」

先刻から、聖一はその女をあらためて観察していた。

陵辱され、長い髪がほどけて激しく乱れているというのに、女の顔はあくまで知的な美しさにふちどられていた。たぶん三十代前半だろうが、その整った顔が年齢をわからなくさせている。

「ちよつと待って。まちがわないでもらいたいわ。私はあなたを心底から憎んでるのよ。古い言い方をすれば、私は死んだ主人に操をたててた。あなたはそんな私の気持ちを、残虐なやり方で踏みにじったんですか

らね」

「ふふ……未亡人の女医ってわけか。ますますそられるシチュエーションだ」

「いい？ 主人が私に残していったものは深い愛情と、この病院。どちらかひとつ取れと言われたら、私はためらわずに愛情の方を取るわ。もしあなたがこれ以上私を辱^{はずかし}めるんだったら、私はこんな病院なんてどうでもいいのよ」

女は厳しい眼差しを聖一に向けた。聖一もそれに対してうすら笑いを浮かべながらにらみ返していたが、やがて、手に持ったナイフをたたむと言った。

「……ふ、そんなもんかね……」

「とにかく、あなたがおとなしくしてるかぎり、ここにおいたげるわ。警察がまわりをうろついてる間はね」

「……ま、いいか。俺にとっちゃ、あんたは、正直、地獄に女神ってとこだしな。条件をのもう。ただし、

下手なことしやがったら、どうなるかわかってるだろうな」

「私も、約束は守るわ」

女は、聖一を見つめたまま、ゆっくりとうなずいた。聖一は、ナイフをポケットにしまい、向きを変えて、ソファの上に脚を投げ出した。

「しかし俺は、さっきあんたがここに隠れてろって言ったとき、てっきり俺のセックスにまいて、そばに

置いときたくなつたのかと思つたぜ」

警戒心をといた聖一の言葉に、女は冷たい語気で言つた。

「下品な冗談はやめて」

ベッドの中の聖一は、苦しそうに唸りながらまた目を開けた。

先刻から何回も、眠りと覚醒の境界を行き来してい

る。そのたびになんとか起き出そうとするのだが、どうしても体が言うことをきかない。

しばらくそんな状態がつづいたとき、部屋のドアがノックされた。聖一はそれに応えようとしたが、声さえまともに出ない。

外の人物はしばらく迷っていたようだが、やがてドアを開けて入ってきた。

「朝食も食わずに、いつまで寝てるつもり。もう四時

過ぎよ」

入ってきた女は、うんざりしたとでもいうように言
った。

「食事はつくったげると言っただけど、私はそれ以上あ
なたの面倒を見るつもりはないのよ。好き勝手な生活
はしないでほしいわ。私は仕事を持ってるんだから」

女はベッドサイドまで来ると、腰に両手をあてがっ
て、聖一の顔をにらみつけた。しかし、その姿勢は長

くはつづかなかった。女は聖一の顔を食い入るように見つめて言った。

「すごい汗。どうかしたの？」

聖一は女に何か言おうとしたが、声にはならず、頬がぴくぴくと痙攣しただけだった。

女は、ちよつと眉をしかめた後、職業的な表情に変わり、聖一の臉に手をかけて、瞳孔をのぞき込んだ。

「そうとうな高熱ね。ちよつと待ってなさい」

女は部屋を出て行った。そして五分後、医療袍と、スポーツウェアを手に持って戻ってきた。

かけ布団をはねのけ、聖一の上体を持ち上げた女は、汗で濡れたスエットスーツを脱がせた。そして鞆から聴診器を取り出し、聖一の胸のあちこちに当てた。

「肺炎になってるわ」

女はそう言うと、注射器を取り出し、聖一の腕に、手早く射した。

その後、持ってきたスポーツウェアの上着を着せ、今度はズボンを替える作業にかかった。聖一はぐったりしていたが、小柄だけに女の力でも、さほど苦勞せずに扱えるようだった。

「ふー、下着もぐっしより。それにこの下着、何日も替えてないでしょ」

女は、露骨に顔をしかめて言った。

聖一は何日も着の身着のまま、山中を逃げまわっ

ていたのだ。それもしかたのないことだった。もちろん、昨夜入浴したからといって、替えの下着など持つてはいなかった。

「困ったわね。主人のはもう処分しちゃったし……」

女は、そう言っただけで息をついた。

「しょうがないわ……」

ふたたび部屋を出ていき、今度はすぐに戻ってきた女の手にはピンクの布きれのようなものが握られてい

た。

「私のお古のショーツだけど、我慢なさい」

女は、きわめて事務的に聖一の脚からブリーフを抜き取ると、そのピンクのショーツを履かせた。ズボンを履かせ、布団を着せた後、女はまたため息混じりで言った。

「なんで私がこんなことしなきゃならないんだか……。今日ほど、自分が医者になったことを呪った日はない

わ。：：ちよつと水分とらなきやね。ジュースかなんか持ってくるから」

一週間が過ぎ、二週間がたち、聖一の体調は、順調に回復していった。聖一自身の若さのせいもあつたが、女が適切に手当し、まめに介抱してくれたことも大きかった。

他人を信じず、自らの冷酷さを誇りとしてきたテロ

リストの聖一と言えども、そんな彼女に対して、最初のような態度をとりつづけるわけにはいなくなつた。

毎日の会話の中で、聖一は、彼女自身のことについてもいろいろと知った。

能^{のとや}登谷香奈。それが彼女の名だった。三五歳だという。医学部の学生だった頃、大学に講師として来ていたこの病院の前院長、能登谷俊樹と知り合い、卒業

と同時に結婚した。俊樹は、香奈より一八歳も年上だったという。当時からの病院は美容形成の専門医院として、一部では名が通っていたらしい。徹底的な秘密主義と、俊樹の（そして、後には香奈の）形成外科医としての腕がよかったこともあり、とんでもなく高い料金にもかかわらず依頼者はあとを絶たなかった。経営はきわめて潤沢だった。夫婦仲もうまくいっていた。

しかし四年前、俊樹が四九歳の若さでガンで死んだ。それ以来、香奈が院長として、自分より年上の三人の医師と十数人の看護婦や事務員たちをリードして、この病院を切り盛りしているというわけだ。

それらのことは、べつに香奈のほうからしやべったわけではない。聖一が、ちよつとした機会をとらえて、香奈から聞き出したのだ。聖一が、他人のことにそこまで興味を持ったことは、これまでなかった。もちろ

ん他にやることがなかったせいもあったが、香奈のこ
とをあれこれ知りたがる自分を、聖一自身も不思議に
思っていた。

聖一は、思春期の頃から女の子にまともに相手にさ
れず、貧弱な自分の体格にコンプレックスを持ちつづ
けてきた。商売女を抱いたことや、強姦まがいな女（そ
れはたいてい聖一たちと敵対するセクトの女性活動家
だった）を犯したことはあるが、まともな恋愛など経

験はない。だから、香奈は、母以外で自分に優しく接してくれたはじめての女性だったのだ。

「今日もあの刑事が来たわ」

聖一がこの屋敷に来て一か月が経過しようとしているある夜、リビングでテレビニュースを見ていた聖一向かって、夜の回診から戻った香奈が言った。

「警察はあなたたちの死体すら発見できないから、そ

うとういらいらしてるようね」

聖一とわかれて山を降りた冷泉とひろみが逮捕されたというニュースも報じられていない。彼らもたぶん、うまく逃げおおせたにちがいなかった。

「それはそうよね。来日中の友好国の大臣が殺されて、その犯人がひとりも逮捕できないんじや、政府の面子はまるつぶれだもの」

「いらいらは俺だっておなじさ」

相変わらず香奈のスポーツウェアを着た風呂上がり
の聖一は、吐き捨てるように言った。

「ふふ、もうこの暮らしにも飽きたってわけ」

「そりやそうだろ、毎日何もすることがないんだ。体
がうずうずする」

香奈は白衣を脱ぐと、いったん自分の部屋に入り、
モスグリーンのカーディガンをはおって出てきた。

「あら、髭、剃ったのね」

聖一と向かい合ってソファに座ると香奈は言った。ここに來て以來、聖一は不精髭を生やしていた。聖一の顔からその髭がきれいさっぱり消えている。

「ああ、風呂場で新しい石鹼を探して棚をがさごそやっていたら、まだ使えそうな剃刀が出てきたんでな。勝手に使わせてもらったぜ」

「死んだ主人のが残ってたのね……」

香奈はなにかぼんやりとした調子でそう言った。

「なにを人の顔じろじろ見てるんだ」

「え？ ええ。あなたって、きれいな肌してるのね」

そう言うと、香奈は、ソファを立ち、聖一の隣に座りなおして顔を近づけてきた。

「なんだよ」

初めの頃よりは親しく会話を交わすようになったからと言って、香奈が聖一に対して警戒心をといたわけではない。いつもある程度の距離をおいていた。だか

ら、こんなふうに香奈のがわから聖一に近づいてくるのは初めてのことだった。

「あなた、いま二五歳だって言ったわね」

「ああ、それがどうした」

「男性で、その年齢で、こんなにきめの細かい肌をしてるなんて、ちよっと信じられないわ。しかも色白だし。何千人に一人って体質ね」

職業的な興味からだろう。香奈は、聖一の頬のあた

りの肌に見入っていた。香奈の吐息が聖一の耳にかかった。

「やめろよ」

香奈が顔を撫でかけたので、さすがの聖一もそれを振り払った。

香奈は、そんなことは意に介さないように、まだ聖一に見入っていた。

「皮膚細胞が老化してないのよね。大きさがそろって

きれいに並んでる」

「ちよつと……静かにしろ」

突然、聖一は大声で香奈の独白を制した。しかしそれは、さっき香奈の手を振り払ったのとはまた別な理由でだった。

「……ん？」

聖一の鋭い視線に気づき、その先を香奈が見ると、テレビに、一軒のアパートが映し出されていた。そし

て、そのひとつの部屋から何人もの刑事らしい男たちが段ボール箱を抱えて出てくる図がつづいた。

「あなたたちの……アジトね」

聖一は、テレビに見入ったまま、無言でうなずいた。

ニュースのコメントは、そのアパートで過激派組織「世界同時革命軍」のメンバー三人が逮捕されたが、この三人は、例の爆弾事件には直接関与していないもようだと伝えた。

「……くそっ」

聖一が、吐き捨てるように言った。

「国家権力が仲間を何人もパクってるっていうのに、
なんで俺はこんなところにくすぶってなきやいけない
んだ」

香奈はその言葉に皮肉な口調で言い返した。

「私だって、いてほしくはないわよ」

「あんだなんか、俺の気持ちかわかるか。弾圧され

てる仲間の様子も、テレビでしか知ることができないんだ」

「電話で連絡とれないの？」

「あんたも、馬鹿だな。これだけまわりを刑事がうろついてるんだ。とうに盗聴機が仕掛けられてるよ」

「……そうなの？」

香奈は、ちよつと心外そうな顔をした。

「どこから見られてるかわからないから、俺は、窓の

そばにも近づけないんだぜ」

聖一は、そこで香奈の方に目をやり、冗談のような口調で言った。

「……なあ、あんた、整形外科医だろ。俺をまったく別人にできないか？」

「え？……つまり、別人になって、外へ出たいって言うの？」

「……ああ」

「ふふ、無理よ。顔はある程度はつくりかえることもできるけれど、あなたの体は特徴がありすぎるわ。いくら顔をいじっても、すぐ見破られる。手術でも骨格までは変えられないもの」

会話は、そこでいったん途切れた。聖一が、急に不機嫌そうな顔をして、またテレビの方に目を戻したからだ。

香奈は、聖一の身長のことを言ったのだ。そして、

それは、聖一がいちばん触れてほしくないことだった。香奈は、ちよつと考え込むように、聖一の顔を見ていた。そして、しばらくして言った。

「ひとつだけ、いい方法があるわ」

「ん、：：なんだ？」

聖一は、まだ不機嫌そうに、その厚ぼったい一重瞼の目を香奈に向けた。

「女装するのよ」

聖一は、一瞬、狐につままれたような顔をした。そして、さらに不機嫌そうに言った。

「馬鹿にしてるのか。たしかに俺は背が低いさ。しかし、この顔が女に見えるか？」

「そう、そこよ」

香奈は、わが意を得たりとばかり、身を乗り出すようにして、聖一の言葉を受けた。

「女にばけるつもりなら、とりあえず顔だけつくりか

えればいい。あなたの身長は、男としては目立つけど、女ならいくらでもいる背の高さなのよ。顔を変えて、女になれば、誰も疑わないわ。それに、その肌なら、けっこう美人にできると思う」

香奈は、自分の考えになにか興奮しているようである。えあつた。

「そうよ、それがいいわ」

聖一があっけにとられていると、立ち上がった香奈

は、いきなりテーブルの電話をとり内線用のボタンを押した。

「あ、鈴木さん？　すぐにオペの用意をして。ええ、今夜やるの。：：それから、手術室には誰も近づけないで。アシストもいりません。私ひとりで執刀するか。：：ええ、だいじょうぶ。ちよつと事情があるクランケなのよ。：：そう、有名な方。私以外には知られたくないっておっしゃってるの」

翌朝、麻酔から覚めた聖一の顔は、手術前よりさらに腫れぼったく、醜くなっていた。鏡を見て声を失った聖一に対して、香奈は朝までにおよんだ手術の疲れも見せず「あれだけ手を入れたんだもの、腫れ上がって当然よ。二週間もすれば、とびっきりの美人になってるわ」と涼しい顔で言った。

香奈の言葉どおり、一週間がたち、十日がたち、聖

一の顔の腫れがひくと、そこには、聖一自身も驚くほど別人の顔が現れた。

それを香奈は「素材がよかったのよ」と表現した。

顔の骨格はもともと小さいのに、そのうえに脂肪が厚ぼったくつき、醜くしていた。そのぶんだけ、骨を削るような大手術をしなくとも、すっきりした顔に変えることができたと言うのだ。

いちばん印象が変わったのは目だった。いつも厚ぼ

まったく眼球におおいかぶさっていた一重瞼が、ぱつちりとしたとした二重になっていた。目をひらいたりとじたりすると、まるでその音が聞こえてくるほどに、瞼が大きく動いた。聖一自身、鏡を見るたび、こちらを見つめてくるその黒目がちの瞳に、どきりとした。

鼻は、とくに高くしたという形跡はないのだが、団子鼻気味だった小鼻の肉が大幅に削られ、鼻筋がきれいにとおって見えた。その上で、先がほんの少しだけ

上向き加減に変えられ、可憐な印象になっている。

そして、顎。おそらく先になにか入れたにちがいない。四角張って、その先がふたつに割れているような感じだった顎が、全体にはやさしい曲線を描き、さらに先の方は三角形に細くなっていた。そのほかにも、厚かった唇が薄くなっていたし、頬も心持ちふつくらしたように見えた。

十日を過ぎると、香奈は「髭の処理もしておいた方

がいい」と言い出し、四日ほどかけ、毎晩、電子器具のようなものを使って、永久脱毛の処理をした。そのことによる腫れがひくのに、さらに五日ほどかかった。そして、手術から二十日目の日曜日、朝早くからどこかへ出かけていた香奈は、二時を少しまわった頃、たくさんの紙袋や、箱を抱えて帰ってきた。

「シャワーを浴びて、私の部屋に来て」

自分のベッドに寝ころんで、雑誌を読んでいた聖一

に對して、香奈は、どこか楽しげに言った。

「本気でやるのか？」

聖一は、まだ不本意だと言わんばかりに不機嫌そうな声をあげた。

「これだけ顔が変わればじゅうぶんだろ。サツにも気づかれないよ」

「だめよ、言ったでしょ。男の格好をしている限りは、あなただってこと、すぐわかるわ。とにかく、仮装行

列かなにかのつもりで、やってみなさいよ」

聖一は渋々というふうにはベッドを立った。しかし、内心では、ここまで自分の顔を変えてくれた香奈の目の確かさに感服もしていたので、試しに香奈の言うとおりにしてみようと思っていた。テロリストのすごみはすっかり消えてしまったが、聖一は、この顔がけつして嫌いではなかった。

バスローブに身を包んで、香奈の寝室にはいると、

彼女は、自分のベッドの上に、女物の服などをひろげて待っていた。

「ショーツは、今日も私のお古を穿ってるのよね」

「……ああ」

ふてくされたように答える聖一にかまわず、香奈はベッドの上から女物の下着を取り上げて言った。

「じゃあ、これをつけて。乳癌切除手術をした患者用の、シリコンパッド入りブラをとりよせたのよ」

そのブラジャーを受け取ると、聖一は、黙ってそれを見ていた。

「なにしてるの？…わかったわ。ローブを脱いでむこうを向いて」

聖一が相変わらず不機嫌そうな表情のまま、言われたとおりにすると、香奈は、そのブラジャーに聖一の腕を通し、ストラップを肩にかけて、背中の中のホックをとめた。

ブラカップの内側が、聖一の胸にぴったりと密着し、中のシリコンが、ほんの少し揺れた。聖一は、なぜか体の中をゾクゾクとしたものが走るのを感じていた。

「次はこれよ。それくらい自分で穿きなさい」

香奈はパンティーストッキングを手渡しながら言った。

聖一は、ため息をひとつつくと、それに脚を通した。「だめよ、そんな穿き方じゃでんせんしちゃうわ。こ

うやって、くるくるつとまるめて……そう。あら、あなた、すね毛はうすい方だからだいじょぶだと思ったのに、やっぱりちよつと気になるわね。そっちも脱毛しとけばよかった」

妙にはずんだ声の香奈に対して、聖一は皮肉のひつつでも言いたかったが、じつはそれどころではない心境になっていた。体の一部が、変化しだしたのだ。男性自身が怒張し、ショーツとパンストを激しくもち上

げていた。

俺はなんでこんなばかげたことで興奮してるんだ？

聖一は、香奈の視線がその部分にとまるのではないかと、動揺した。

こんなことに感じて勃起しているなんて、まるで変態だ。

そう思った。

だから、香奈が「じゃ、次はこれを着なさい」と差

し出したスリップを奪い取るようにして、かぶった。
とりあえず、これでいくらか前をカムフラージュで
きる。

ところが、その絹のスリップの肌ざわりに聖一の興
奮はいよいよ昂まった。下腹部の突出はスリップの上
からでもはっきりとわかった。

聖一の気持ちは完全にうわずっていた。そうなれば、
もう香奈の言うがままだった。

聖一は、香奈に言われるままにピンクのフレアーのワンピースを着せられ、ベッドに腰掛けさせられ、香奈の手で化粧された。

香奈は三十分以上もかけて、聖一の顔を丹念にメイクしたが、そのあいだ、聖一は、前の部分をそれとなく両手で押さえて、じっとしていた。

メイクが終わると、香奈は、ベッドの上に置いてあったウィッグをとって、聖一にかぶせた。ふんわりし

た柔らかい髪が聖一の頬にふれた。

そのあと、香奈は、聖一の耳にイヤリングをつけ、ワンピースの胸にコサージュを飾った。

「さあ、こっちへいらっしやい」

聖一がおずおずと立ち上がると、香奈は聖一の腕をとって、クローゼットの扉の裏の、大きな姿見の前に導いた。

「……あ」

聖一の口から、思わず声が漏れた。

鏡の中には、少女と言ってもいいような初々しい女が、大きな瞳を見開いて佇んでいた。

「そんな……。これが……。俺？」

聖一はスカートの中でそれがうずいているのさえも忘れて、鏡の中の女に見入った。

その体が、知らず知らずのうちに、ゆっくりと左右に回転した。

スカートがふわりとふくらんだ。

「これで、どこにでも行けるわね、聖……子」

香奈が言った。

至福の章

ゆるい勾配の裏道に、
ヒールの音がこつこつと響い
た。

ほんの数ブロック先からは、幹線道路を行き交う車の音が聞こえてくるのに、住宅やマンションが狭い道の両側にひっそりと並ぶこのあたりに、人影はない。

同志であり、組織の最高幹部でもある大乘寺の隠れ家へ向かう道。

聖一はこの一帯の地理を熟知していた。過去には、込み入った裏道の、さらに抜け道を使つて、警察の尾行をまいたことも一度ならずある。ふだんなら最も安

心して歩ける道だった。

しかし、今日は状況がちがった。

聖一は、国家レベルの重要犯罪人である。それも主犯なのだ。以前のように、集団テロ事件に連座しているというのとは程度がちがった。官憲は血眼になって、聖一を探しているだろう。パトロール中の巡査にまで、聖一の特徴は徹底されているはずだ。

だから、私鉄電車の中でも、池袋での乗り換えの際

にも、そして、山手線車中でも、聖一はずっと緊張していた。高田馬場の東口を出て、幹線道路を避け、裏道を急ぐ今も、その緊張は持続している。

ただ、今日の場合、その緊張の原因は、単に追われているからというだけではなかった。

今、聖一は、ピンクのワンピースに身を包み、インポートもののしやれたバッグを肩にかけ、慣れないハイヒールのパンプスで歩いていた。

午前十一時。五月中旬の空は、まぶしいほどに明るい。女装した聖一の姿は、文字どおり、白日のもとに晒されている。たとえば、道を歩く人がいないとしても、住宅やマンションの窓越しに誰が見ているとも知れないのだ。どこから見られても、女として不自然でない姿態を保っていなければならぬ。

あの女にのせられた俺が、馬鹿だったんだ。

朝からの緊張で、もうすっかり疲れきった聖一は、

香奈に言われるままに女装して出てきたことを悔やんだ。

と、わき道からだろう、数人の女たちの声が聞こえてきた。どうやら、こちらへ近づいてくるようだ。若やいだ弾んだ会話の様子からすると、近くの大学に通う女子大生たちにちがいない。

聖一の緊張はさらに高まった。ブラジャーの中で揺れるシリコンパッドの裏に汗がたまっていくのが感じ

とれた。

案の定、女子大生らしい三人が、聖一から十メートルほど先の角を曲がって、こちらへ向かってやってきた。

聖一は、そのまま引き返したいような衝動を押し隠し、できるかぎり自然に脚を進めようとした。だが、そう思えば思うほど、パンプスの足はもつれそうになる。

話に夢中だった女子大生たちは、聖一に気づいたらしく、突然、ぱたりと会話を中断した。

三人の目が、自分に集中しているのが、聖一にはよくわかった。

女子大生たちは、何か不自然なほどおし黙ったままこちらに近づいてくる。

そして、そのまま、無言で通り過ぎる。

なにか、微妙に張りつめた空気が流れた。すれちが

う寸前まで、三人のそれぞれが、聖一の方をちらちらと見ていたような気がした。

聖一は、ひどく不安になった。今朝から聖一のまわりに近寄る人間は、おおむね、今の女子大生たちと同じような反応を示すのだ。私鉄電車の中で横に座ったサラリーマンふうの中年男もそうだった。スポーツ新聞を読むふりをして、こちらをちらちらとのぞき見ていた。池袋のホームで前に並んでいた子供連れの女も、

電車に乗るまで、何度かそれとなくこちらを振り向いた。山手線で、ドアのそばに立ってウォークマンを聞いていた予備校生らしい男など、聖一が乗ってから降りるまで、ずっと露骨な視線を向けていた。

しよせん俺に女装なんて無理なのだ。

「くそっ、あの女め！」

聖一は、香奈が何度も言っていた言葉を思い出し、パールピンクの口紅が塗られた唇で、小さく悪態をつ

いた。

「あなたはどこから見ても女にしか見えないんだから、それを、まず自分自身が信じなさい」

いちばん近くの駅——といっても、四五分近くかかるのだが——まで車で送りながら、香奈は聖一にそう言った。

「あの刑事だって、何も疑ってなかったでしょ」

「どうだか……」

車窓を流れる山の景色をながめながら聖一は答えた。

刑事とは、聖一のことを追って、張り込みを続けている公安課の大河内のことだ。

先刻、香奈の病院の敷地を出て少し来たところで、背広をだらしなく着た大河内が、道にのこのこ現れ、片手を上げて車をとめた。見ると、森蔭に、中古の力

ローラが停まっていた。その中で、病院への人の出入りを見張っているにちがいない。

「お出かけですか？」

パワーウィンドーを降ろした香奈に向かって、どろんとした目つきの大河内が言った。

「あなたもご苦労なことね。もうあの事件から二ヶ月近くたっているというのに。犯人なんて、とうの昔に逃げてしまってるんじゃないかしら」

「ええ。課内でもそういう意見が主流でしてね」

「でしょうね。もう、いいかげんで引き上げていただけませんか。うちもそうとう迷惑してるんですよ。

あなたのこと、写真週刊誌のカメラマンじゃないかって、ここまできて、引き返してしまう芸能関係の患者さんだっていらっしやるそうだから」

「……こちらは？」

大河内は、香奈の言葉を見無視して、車の中をのぞき

込んでそう言った。

「刑事さん、聞いてらっしゃるの？」

「お見かけしない顔ですな」

大河内は聖一の顔をあげすけにじろじろと見て、そう言った。

大河内と目があい、聖一は視線を下に落とした。以前、別件で逮捕されたとき以来、お互い、相手のことは知りつくしていた。聖一は、内心の動揺を必死で隠

した。

「私の親戚のものです。今度、うちのことを手伝ってもらうことになって」

香奈が言った。

「ほう、先生のご親戚。道理でおきれいだ」

大河内は、口のはしで下品な声を出してヒヒと笑った。

聖一は、家を出る前に香奈と打ち合わせていたとお

り、少し恥ずかしそうに微笑んで、会釈してみせた。

……。

「あの人もあなたのこと、きれいだって言ってたじゃない」

香奈は、今度はいくぶんからかうような調子で言っ
た。

「刑事なんて、口からでまかせに調子のいいことを言
う連中だからな。それに、あんた、俺がきれいだと言

われて、喜ぶとでも思ってるのか」

ハンドルを握った香奈は前方を見つめたまま、聖一の言葉に対し、含みのある笑いを浮かべている。

「……け、冗談じゃないぜ。こんなもの着させられて……、胸は窮屈だし、股の間がすーすーする。我ながら、情けなくて涙が出るぜ」

助手席にふてくされたように腰掛ける聖一に、香奈は平然とこう言った。

「人の考えなんて、状況によっていくらでも変わるものよ」

その古アパートの前の通りを、聖一は三度ほど往復して、まわりをうかがった。どうやら、警察が張り込んでいる様子はないようだ。

さらにじゅうぶんに注意を払いながら、塗装がはげ落ち、錆が浮きだしたアパートの鉄階段を昇る。コン

クリートがむき出しの廊下を歩き、大乗寺の部屋の前まで来て、ドアをノックする。

中から返事はなかった。しばらく待った後、聖一は、もう少し強くノックしてみた。やはり、室内に気配はない。呼びかけようかとも思ったが、女の格好をしていることもあり、声を出すのはためらわれた。

と、隣の部屋のドアが開いた。

聖一が目を向けると、そこに、水商売ふうの中年女

が立っていた。

「……あんた、河野さんの知り合い？」

聖一を上から下までなめるようにながめた後、女がぶつきらぼうに言った。河野とは、大乗寺の変名である。

聖一がかすかにうなずくと、聖一の方をぽかんと見たまま、女はぶつぶつと独り言のようにしやべった。

「管理人さんが困ってたわ。河野さん、二ヶ月位前に

出てったきりで、戻ってこないんだから。部屋代も入ってないし、荷物はそのままだから、他の人に貸すわけにもいかないしってね。あんた、どこ行ったか知らない？」

聖一は、あわてて首を横に振った。

「……ふうん、そう」

そう言ったきり、女は聖一のことをながめていた。

部屋に戻るでもなく、ただ聖一の顔を見つめているの

だ。

その女の不^{おしつけ}躋な視線に、聖一は困惑した。こうじろじろと見られたのでは、無視して立ち去るわけにもいかない。そのきっかけをつくるには、自分の方から、なにか言わなければならない。しかし、声を出せば、たぶん相手が持っているだろう不信感は、さらに増すにちがいない。

動くに動けず、一分近くが経過しただろうか。やつ

と意を決した聖一は小さな声で「失礼します」と言つて、女の前を通りすぎた。そして、逃げるように階段を降りた。そんな聖一の後ろ姿を、女はずっと見送っていた。

新宿の街は暮れ色に染まり、ネオンがさまざまな色と動きで、点滅し始めている。

聖一は疲れきった足どりで、人目を避けるように、

舗道を歩いていた。

大乘寺がすでにあのアパートを出ているのは、ある程度、予測していたことだ。組織があれだけのことをやったのだ。最高幹部である大乘寺が、いつまでも東京にとどまっているのは、危険すぎる。地方のアジトか、場合によっては、海外へ逃走したのかも知れなかった。

大乘寺との直接の接触をあきらめた聖一は、あの後、

他の幹部のアジトや、シンパの家、連絡先として使っていた場所など、都内の数力所を尋ねた。しかし、どこに行っても組織に連絡をとることはできなかった。あるところはすでに警察の手入れがされ、他のところは私服らしい人間が張っていて、近づけなかったのだ。けっきょく、これだけの危険を冒し、女装までして出てきたのに、何の成果も得られなかったというわけだ。

長時間、ハイヒールで歩いたせいで、脚は棒のようになつていた。そして、それよりも、もつと疲労感の原因になつていたのは、他人の目だ。聖一が歩いたあらゆるところで、例の「視線」と遭遇した。その目つきから察するところ、どうやら、犯罪者として疑われているのではないようなのだが、どこか怪しげな存在として、人々の目に映っているのは確かだった。たぶん、誰が見ても男だということがわかるのだ。

聖一は、自分が安っぽいゲイボーイかなにかだと思われているにちがいないと考えた。なにかひどくみじめな気持ちだった。

「カノジョ、どこ行くの？」

突然、誰かに肩をつかまれた。

あわてて振り払おうとしたが、不意のことだったのと、その背の高い若い男が、背後から抱きすくめるようにつかんできたのとで、聖一は身動きがとれなくな

った。

「よかったら、お茶飲まない？」

男は、聖一の耳に息がかかるほど顔を近づけて言った。

聖一は、思わず男の方に顔を向け、にらみつけていた。

「オー、ガッテム。そんなコワイ顔しなくたっていいじゃない」

男は、その視線をかわすために、わざとにやついた顔をした。

聖一は、男をさらににらみ、低いドスのきいた声で言った。

「バ、カ、ヤ、ロ」

若い男は、あっけにとられたように、手の力をゆるめた。

聖一は、男の手を払いのけ、一瞥をくれると、早足

で歩き始めた。

「おい、待てよ。そりやないだろ」

一瞬の後、取り残された男は、声をあげて、ひつこく聖一を追いかけてきた。まだ女だと信じているようだ。

聖一は、思わず走り出していた。

あんな馬鹿にかかずらわっているひまはない。

男をまくため、あえて人通りの激しいメインストリ

ートに出て、その人波の中を縫うように足をすすめた。
ハイヒールのせいと、脚にまとわりつくスカートの
せいで、あまり速くは走れなかった。人の目もある。
しかし、しばらくすると、男はあきらめたらしく、追
ってくる気配はなくなった。

聖一は息を整えるため、立ち止まった。そこは、大
きなテナントビルの前のパブリックスペースだった。
舗道に、花壇と、いくつかの巨大なアブストラクトが

造りつけてある。そのひとつにもたれかかって、聖一は休んだ。

俺は今、ナンパされかかったってわけか。

どこか自虐的なため息をつきながら、聖一は地面に落としていた視線を上げた。

そして……、息を飲んだ。

「……え？」

聖一がいる位置の二メートルほど先に、ステンレス

製の四角い柱が立っていた。その鏡のように磨かれた表面に、ひとりの若い女の全身が映っている。

聖一は、その女に見入った。

驚いたようにこちらを見つめてくる大きく印象的な瞳。少しだけひらいた魅惑的な唇。細い肩から落ちかけたショルダーバッグ。その肩ひもにかけた形のよい指。折れそうなほどにくびれたピンクのワンピースのウエスト。微風に揺れるフレアスカート。どこか不安

定に全身を支えている白い足首。

まるで人形のように整ったその顔と、全身からかもしだすはかなさのようなものが、アンバランスなまま調和し、見るものの心を不安にするほど美しい。

聖一は、思わずその柱に二三步近づき、はじめて、その娘が自分自身であることを認識した。

夕刻の薄暗闇の中に切り抜かれたその四角の空間に、聖一は「女」として立っていた。たぶん、その近

くを行き交うどの女より印象的な「女」として。背景で点滅する、遠くぼやけたネオンさえも、聖一の美しさを浮き立たせ、祝福しているようですらあった。

そうなのだ。

ステンレスの鏡の中の女は、何かを確信するようにうなずいた。

聖一は、その時はじめて、今朝からの人々の視線の謎の正体を悟った。

電車の中のサラリーマンや予備校生、そして先刻のナンパ男……。男たちが向けてきたのぞき見るような、探るような目つきは、聖一の美しさに向けた好色な視線だったのだ。

あの女子大生たち、ホームの女、それに大乘寺のアルバイトの隣室の女……。女たちが送ってきたどこか緊張した、それでいて我を忘れたような視線は、驚嘆と嫉妬がない混ぜになった彼女たちの心の表れにちが

いなかった。

大河内が言ったように、自分は本当に「きれい」なのだ。

聖一は、そのアブストラクトにさらに近づき、自分の顔に見入った。

朝からほっておいたせいで、化粧が落ちかかっているのが気になった。

「いい？ アイメイクまでは無理としても、口紅とフ

アンデーションくらいはときどき塗りなおすのよ」

今朝、化粧してくれながら言った香奈の言葉を思い出した。

聖一はためらうことなく、そのビルに入り、婦人用のトイレをさがした。

化粧室の鏡に向かい、バッグからコンパクトと口紅を出して、慣れない手つきで塗る。

何度か失敗したが、十分後には、聖一の顔はさらに

美しさを増したものになっていた。そしてそれは、単に化粧なおしのためばかりではなく、さっきまではなかった自信に満ちた輝きが加わったせいでもあった。

その後、聖一は数時間に渡って、街を歩いた。先刻までの疲れた足どりではなく、さっそうと、表情を輝かせて。

聖一が思ったとおり、道行く人々は、皆一様に聖一

の方を見た。ちらりと見て、自分の気持ちを押さえ、あえて無視する者、露骨にじろじろと見てくる者、その対応はさまざまだったが、それらの視線は、けつしてさげすみなどではなく、興味や驚嘆や羨望や嫉妬というものだった。中には、すれちがいざま口笛を吹く男たちの集団もあった。また、恋人と歩きながら、その視線が聖一に向くのを恐れて、彼氏の腕にわざとらしくしがみついた娘もいた。

聖一は、それらの視線を楽しんだ。

そんな経験は、これまでの聖一の人生の中ではなかったことだった。

身長の低さで目立ったことはあっても、聖一は人々からいい意味で注目されたことなどなかった。むしろ、ないがしろにされ、無視されつづける存在だったのだ。こんなふうに、ただ歩くだけで、人々から存在を認められ、驚嘆の眼差しで迎えられるのがうれしかった。

なんだか、自分が、この世界の中心に位置しているような気持ちだった。

そんな高揚した気分で、時のたつのも忘れて街を歩いていたせいで、聖一が香奈のもとに帰りついたのは夜の十一時を越えた頃だった。

タクシーを降り、今朝香奈から渡された金の残りの大部分を払い、病院の脇を通って家に入ると、香奈は、

リビングでコーヒーを飲みながら、専門書を読んでいた。

「やっぱり帰ってきたわね」

聖一の方に顔を向けた香奈は、第一声でそう言った。そう言われてはじめて、聖一は別にここに帰ってくる必然性などなかったことに思い至った。事実、今朝ここを出るときは、何とか組織と連絡をとってそのまま逃走するつもりでいたのだ。

「……ああ」

聖一は返答に困って、あいまいにうなずいた。

「座ったら。コーヒー煎れるわ」

言うとき香奈は、キッチンに立った。

コーヒーカップを持ってふたたび戻ってきた香奈は、ソファに腰掛けた聖一の方を見て、くすつと笑った。

「なんだよ」

「今日一日で、すっかり女が板についたみたいね」

言われて聖一は、膝頭と足先を揃え、脚を傾けるようにして座っている自分の姿に気がついた。聖一は、咳払いをして、わざと姿勢をくずす。

「やめなさいよ。そのスタイルにそんな格好は似合わないわ。だらしない女に見えるわよ」

香奈は、テーブルの上にカップを置きながら、面白そうに言った。

「るせいな」

聖一は言い返したが、また膝頭を揃えて座りなおした。真ん前に座った香奈の位置から、スカートの中が見えそうな気がしたのだ。

「どう？　もてたでしょ、街で」

香奈は自分のコーヒーに口をつけながら、また心から楽しそうに言った。

「そりやそうよね。私が、いちばんもてるような顔に

つくりかえたんだもの。男がいっぱい言い寄ったんじゃない？」

「やめろよ。馬鹿にすんな。好きでしてんじゃないんだから」

聖一は、こちらの心の中を見すかしたような、先刻からの香奈の言葉にたじろいでいた。

「そう。じゃ、着替えたら。いつもの味もそっけもないスポーツウエアに」

「……ああ」

言ったものの、聖一は立とうとしない。

「ほら、やっぱり、そのままの格好でいたいんだ」

「そんなことは……ないよ」

聖一は、香奈からぷいと顔をそむけ、窓の外で微かな光を浴びて揺れる湖の水面をながめた。

そのまま、二人ともしばらく黙っていた。

やがて、からかうような眼差しで聖一を見ていた香

奈が口を開いた。

「どう？　ひとつ提案なんだけど」

聖一がふたたび香奈の方を向くのを待って、香奈はつづけた。

「どうやら仲間と連絡はとれなかったようだし、あなた、もう少し、ここに隠れている必要があるんでしょ。それなら、いつそのこと、そのまま女でいない？　病院には、他の先生や看護婦もいるし、あなたを隠して

おくにも限界があるわ。あなたが女でいるなら、田舎から出てきた年のはなれた妹とかなんとかいうことにして、神経つかわずに暮らしていけると思うの。どう？」

聖一はふてくされたように、黙って香奈を見つめていた。しかし、その無言は、香奈の言葉に対する同意に他ならなかった。

次の日曜、聖一はふたたび東京に出た。前回とちがったのは、香奈の車で、香奈といっしょに上京したことだった。

香奈は何軒かのブティックをまわり、下着からウィッグまで、聖一用の女性用品を、何十万も使って、揃えてくれた。

その夜、家へ帰った二人は、深夜まで秘かなファッションショーを催した。香奈は、着せ替え人形遊びさ

ながらに、聖一にさまざまな服を着せた。

「やっぱり、女の子っぽい、かわいい服が似合うわね」
香奈のそんな言葉に、ワインのせいでハイな気分になっている聖一も、可愛らしいポーズをとってみせたりした。

夜の二時をまわった頃だった。

さすがに疲れた二人は、ソファに並んで、酔いざましの紅茶を飲んでいた。

「しかし、あんたも変な女だよな。こんな俺に、そんなに大金つぎこんで、とんでもない遊びをするんだから」

「そうね。：：でも、けつきよく、あなたが、ほんとにかわいらしいからよ」

「ふ：：ものずきな女だぜ」

聖一のその言葉に、香奈は聖一の方に体を寄せ、言った。

「ねえ、もうそんなことばづかいやめなさいよ。あなた、女の子なんだから」

香奈の手が、聖一の膝の上にのせられた。聖一は、その時、最後に着せられた赤いリボンがたくさんついた夏用のミニのパーティドレスを着ていた。だから、香奈の手は聖一の腿に直接触れることになった。

「私もあなたのこと、これから聖子って呼ぶわ。だからあなたも女らしくなさいな。ほら、見てご覧なさい。

聖子は女の子よ。こんなきれいな脚をして」

香奈は絹のストッキングに包まれた聖一の腿をなでた。

「おい、なにするんだよ」

聖一は、驚いたように言った。

香奈の手の微妙な動きに体じゅうが痺れ、こわばるのを感じた。そして、ミニのスカートの中には、もつとこわばっているものがあつた。

「ダメでしょ、そんなことばづかい」

聖一の言葉にかまわず、香奈はつぶけた。もう片方の手を、細いストラップだけでむき出しになった聖一の肩にまわし、抱き寄せる。聖一は、身長の高い香奈の腕の中に包まれてしまった。腿の手は、ついにはスカートの中に差し入れられ、内腿を這いはじめた。

「やめろったら！」

聖一は思わず声を荒らげた。

「……そう」

香奈は、突然、その手を引っ込め、聖一から身を離した。

そのあっけなさに、聖一はちよつと驚いたように香奈を見つめた。

香奈は意地悪そうな目つきで見返してくる。

「聖子が、やめろって言ったのよ」

聖一は困惑した。ショーツの中ではそれが、激しく

うずいていた。

怒ったように香奈を見つめていた聖一の目つきが、やがて、潤んだように変わる。

「やっぱり……してほしいのよね」

香奈が言った。

聖一は、思わずうなずいていた。

香奈はにっこり微笑んで、ふたたび聖一のそばに寄り添った。

「ここに、横になってごらんなさい」

聖一をソファに寝かせると、床に膝まづいた香奈は、聖一のむき出しの肩や脚を撫でまわした。そして、その手をスカートの中に差し入れ、一気にストッキングを脱がせた。

聖一は香奈の手が動くたびに、体を震わせた。必死に押さえているのだが、どうしてもそうやってしまうのだ。

やがて香奈は、聖一の背中に手をまわし、ドレスのジッパーを下げた。ストラップを腕から抜き、聖一の体に微妙に触れながらドレスをずりさげていく。ついにはストラップレスブラとショーツだけの姿に剥かれた聖一の全身を、香奈の手が這いまわりだした。

聖一の体はそれに連れてのたうつように動いた。

「声を出してもいいのよ、聖子。ここには二人だけ。

誰もいないんだから」

聖一が穿いた薄いピンクのショーツの一部が張りつめ、突き出し、その頂点の部分にシミが広がっていった。

「……ああ……」

こらえにこらえていた聖一は、ついに耐えられなくなり、身を起こし、香奈の肩をつかんで、乱暴に引き寄せた。

と、――

「おやめなさい！」

香奈は強く突き放すと、冷たい語気で言った。

「私の体に触れることは許しません！」

香奈の思わぬ力で反動を食らった聖一は、ふたたびソファに倒れ込み、驚いたように香奈を見上げた。

「あなたがはじめてここに来た晩に約束したはずよ。

私の体には指一本触れないって」

香奈は、諭すように言うと、さっと聖一のショーツ

に手をかけ、あつという間に脚から抜き取ってしまった。

次に聖一の右腕をとり、ショーツを一方の手首にかけた。さらにそれをぐるぐるとひねり、手首を締めつけたところ、もう一方の穴を左の手首に通す。聖一は、ショーツで手錠をかけられたような形になった。

香奈は、締めあげた聖一の二本の腕を折り曲げさせ、その手を、シリコンパッドで膨らんだ聖一自身のブラ

ジャーの上に、交差させるように置いた。

「聖子は、自分のおっぱいでも撫でてらっしゃい」
にっこりと笑った香奈は、ふたたび聖一の体中を撫ではじめた。

首から肩、わきの下、そしてわき腹。香奈の愛撫は聖一の体の感じやすい部分を微妙に探り当て、時に強く、時に優しく動きまわった。

さらに、それは脚に移り、内腿から膝頭、指の間に

まで執ようにくりかえされた。

ところが、聖一の大事な部分には触れようとしなない。その近くまでいって、聖一の気持ちをはぐらかすように、はなれていくのだ。

聖一の興奮は、出口を失ったまま、際限なく昂まつていった。聖一は、その巧みな愛撫に、自らの胸のシリコンパッドを揉みしだきながら、もはや誰はばかることなく声をあげ、あえいだ。

全身にわたる愛撫が何回くりかえされた頃だろうか。香奈は、聖一の体の中央でいきり立つそのそばまで手を持っていき、その動きをぱたりととめた。

首をもたげ、哀願の眼差しを向ける聖一に対し、香奈は言った。

「聖子、さわってほしいの？」

聖一は、首をすくめるようにしてうなずく。その大きな瞳は、潤んで、香奈に甘えきっている。

「どうしようかな……」

香奈は、聖一の恥毛に指をからめながらじらした。

「……してくれ……頼むよ」

「ほら、また、そんな乱暴な言い方」

香奈は母親が娘をしかるように言う。

「じゃ……なんと言ったら……してくれる……の？」

「そうね、『ねえさま、お願い』って言ってごらんな

さい」

「そんな……」

「じゃ、もうおしまいにしましょうか」

香奈は、聖一の体から、その手をはなしてしまう。
聖一は、せつなそうに体をくねらせ、声に出した。

「ねえさま……お願い」

「あら、聖子、どうしてほしいのかしら？」

「せ……聖子のを、握ってほしいの」

「ふうん……こうかな？」

香奈は、聖一のことを乱暴につかむと、激しくその手を上下した。

「……ああ……」

聖一の体は、その全体で波打った。

半開きにした口から吐息をもらし、瞳から涙をあふれさせ、顎を、白くて細い肩にすりつけるようにしてあえぐ聖一を見て、香奈は言った。

「聖子、とってもかわいいわよ」

「ねえさまの……意地……わる……」

聖一の興奮は、自らのその言葉によって頂点に達した。

甲高いうめきとともに、白濁液が空を飛んだ。

今、含み笑いを浮かべながら見つめる香奈の前に、聖一はぐったりと横たわっていた。聖一にとってそれは、これまでの人生で経験したどのセックスよりも、淫靡で強烈なものだった。

こうして、聖一は香奈の手に堕ちた。

変化^{へんげ}の章

「ウィーン」という軽いモーター音とともに、シャ
ンプー台が起きあがる。

「どうぞこちらへ」

ビニール製の防水ケープをほどいてくれた後、そのシャンプーボーイは、聖一を鏡の前の椅子まで案内した。

椅子に腰掛け、前の鏡を見ると、タオルのまかれた頭の下に、パツチリした目の印象的な顔があつた。形のよい鼻、赤い唇。その下には白い首筋が柔らかな曲線でつづく。紺地に白のピンドットのブラウスは、衿

もとが大きく開いて、その衿ぐりと、半袖の袖口には白いレースがあしらってある。それが、スカートのリボンベルトとともに、シンプルだが可愛らしいお嬢様ふうの印象をかもしだしている。

聖一はそんな自分の姿をもっと楽しんでいたかったのに、美容師はその服の上からヘアカット用のケープをかけてしまった。

頭のタオルがほどかれると、濡れた髪が目の下まで

落ちてきた。もう五ヶ月ちかく切っていない聖一の髪は、頬を覆い、後ろは背中までかかっている。

「どういたしましょう？」

他の美容師たちが「先生」と呼んでいるところからみると、どうやらこのサロンの経営者だろう。四十前後の髭の美容師が、ドライヤーを手に言った。

「この子、これまでずっとショートだったの。ほんとにかまわない子で……」

隣の椅子で、長い髪の毛先をカットしてもらった香奈が答える。

「これから伸ばさせようと思うのよ。とりあえずレアカットふうにまとめてくださる？」

「そうですね。あまり無駄にカットしないようにして……前髪とサイドに、ちよつと部分パーマをかけましょう」

美容師はそう言つて、聖一の髪を持ち上げてみせた。

その手が耳の後ろに触れたせいで、聖一はくすぐったそうに首をすくめた。

「聖子、そろそろウィッグはやめてもいいわね。夏だし、毎日あれをかぶってるのも、うっとうしいでしょ」

五日ほど前、その日三度目のシャワーを浴びて、聖一がリビングに出てくると、夜の回診に出かけるところだった香奈が言った。

聖一はその言葉に、髪を拭きながら壁の鏡をのぞき込んだ。

キャミソールふうのタンクトップで大胆に露出した素肌が、よく手入れされ、ますます白く輝いている。

オレンジ色のショートパンツからすらりと伸びた脚の片方を、少し後ろに引いて、つま先を立てる女っぽい仕草もなかなか堂に入っていた。

聖一が女装して暮らすようになって、すでに二ヶ月

が経過していた。

「美容院へ行くのね。うれしいわ」

聖一は毛先をちよつとつまんで言う。

女言葉もすっかり板についた感じだ。ハスキーではあつたが、その仕草も手伝つて、不自然には感じさせない。

「今度の日曜にね。そうそう、発毛を促すいいお薬があるから、持ってきてあげるわ。じゃ、出かけるから」

聖一は香奈を玄関まで見送った。

「ねえ、ねえさま……」

玄関に立った聖一は、オレンジのマニキュアの塗られた左右の指を腰の前でからめ、恥ずかしそうに言っ
た。

「なに？」

「今夜も……聖子のこと、かわいがってくれる？」

靴を履き終わった香奈は、からかうような目つきで

聖一を見た。

「聖子は、ほんとに甘えんぼね。精いっぱい、おめかしして待ってなさい」

香奈は、聖一のタンクトップのバストのあたりをつきながら言う。ブラジャーの中でシリコンパッドが揺れた。

「ん、もお……。今夜はね、この前買ったバイオレットのナイティを着るの」

「寝化粧はほどほどにね。肌が荒れるから」

「わかってるわ。行つてらっしやい」

香奈を見送ると、聖一はキッチンで手早く皿洗いをした後、自分の部屋に戻り、鏡台の前に座った。

他のしやれた家具類とともに、聖一のために香奈が揃えてくれたものだ。

聖一は今、一日のうち半分くらいの時間を、この鏡台の前で過ごす。美しく変貌した自分の顔を見ている

だけで楽しかった。そのうえ、そこにメイクすること
で、その楽しさは倍加した。

聖一は毎日、メイクカタログを見ながら、さまざま
なテクニックを試してみた。アイメイクや口紅をくふ
うすること、聖一の顔はさまざまに変化した。扇情
的な小悪魔になることもできたし、清楚なお嬢様にも
変身できた。

化粧に疲れると、聖一は家の中のあれこれをした。

昼と夕方、香奈が病院から戻る時間には、二人分の食事の用意をする。料理だけでなく、掃除や洗濯などもした。それが香奈の「いいつけ」だった。

香奈は聖一に、できるかぎり女らしく振る舞うことを命じた。かつての自分からは想像もつかないことだが、聖一はそんなふうに命じられることがうれしかった。言われるままに、女になりきろうとした。そして女らしく振る舞った「ご褒美」に、夜、香奈の手で「か

わいがって」もらうのだ。

寝化粧をし終わると、聖一はバイオレットのナイテ
イを取り出し着替えた。

姿見の前に立ち、そのシースルーの布の中でほの白
く輝く体に見入る。

今日はどんなふうに香奈に甘えようか。このナイテ
イをどんふうに脱がしてもらおうか。そして、その時、
香奈にどんな表情をして見せようか。

鏡の中の聖一は、うつむき加減に首をかしげ、赤い唇を半ば開いて、ちよっとおびえたようにこちらを見ていた。

今もまた、聖一は鏡の前にいる。

ベージュのシルクのカジュアルドレスのボタンをとめ終わると、もう一度、鏡に映った全身を確かめ、くると体をまわして試着室のカーテンを開けた。

「ねえさま、どうかしら？」

その自然光を取り込んだ明るいブティックで、自分の服を選んでいた香奈は、聖一の声に、試着室の前まで戻ってきた。

「うーん……、色目がちよつと聖子には地味かも知れないけれど、でもデザインがかわいいから、いいかな」
「すごくお似合いですよ」

マヌカンの声音には、この店で最も高価な商品を是

が非でも売りたいという気持ちだが、ありありとうかがえた。

「聖子は思うの？」

「うん：：、この髪型には合ってるかなって：：」

「そうね、じゃ、それにする？」

聖一はもう一度鏡の方に向き直ってから、うなずいた。

外巻きにサイドに向かって流した感じでパーマをか

けた前髪が揺れるのを見て、聖一は幸せな気分になった。額の生え際がくつきりと見える。これはウィッグでなく、自分の髪なのだ。

これからはもっとロングにして、いろんな髪型を試してみよう。

聖一はそう思った。

「水着も買わない？」

香奈が聖一の後ろから声をかけた。

「えっ……？」

「さっきあそこに、聖子に似合いそうなのがあったの」
「……でも」

いくら何でもそれは無理だった。どんなに小柄でも、
どんなに仕草が女っぽくても、体の線だけは隠せない。
それに、水着など着たら、たかぶった聖一の体の一部
は必ず変化する。それをカムフラージュすることはむ
ずかしい。

そう思ってたためらっている聖一を、むりやり引っ張って、香奈は水着がディスプレイされた棚まで連れていった。

そこで香奈が選んだのは、サーモンピンクのワンピースのスイムウェアだった。大きく開いた背中の部分に、蝶結びしたリボンがあしらってある。

「かわいい……」

渡された水着を両手で持って吊してみても、聖一は思

わずそう言っていた。

着てみたい。

いったんそう思うと、聖一の気持ちは押さえがたく膨らんでいった。

それを見すかしたように、香奈は聖一をふたたび試着室まで導いた。

「このカップのところにパッドをうまくあてれば、大丈夫だから」

香奈は小声で言うと、聖一を試着室に押し込み、カ
ーテンを閉めた。

聖一は水着を手に持ったまま、しばらくためらって
いたが、思いきったように、着ていたシルクのドレス
のボタンをはずした。ドレスをハンガーにかけ、つづ
いて、キャミソールやブラジャー、そしてショーツも、
すべて脱ぐ。

水着を持ち、脚をとおす。なるべく鏡に目をやらな

いようにして、ペニスを股の間に挟み込む。腰まわりをなじませ、ストラップを引き上げて腕をとおす。床の隅にまとめてあった衣類の中から、ブラジャーを取り出し、シリコンパッドをはずす。それを水着の大きく開いた首まわりから差し入れる。両方を入れた後、形を整え、そこでやつと、鏡を見た。

不自然なところはどこにもなかった。水着は信じられないくらいに聖一の体にフィットしていた。細い肩

の線、くびれたウエスト、大きくはないけれど、きれいな曲線を描き脚へとつづくヒップ。水着から伸びた手脚の肌はちよつと上気したようにピンク色をしていた。

毎日欠かさずにやっているスキンケアのおかげか、聖一の肌は、最近、ますます白くきめ細かくなっている。体全体の表皮そのものが柔らかく丸みを増しているような気さえする。

小柄だとはいえ、聖一も男。しかも以前はテロリストとして肉体的にもハードな局面をくぐり抜けてきた。それなりに筋肉もついていた。それが、この間の生活のせいか、ごつごつした体の線がすっかり消えていた。特にここ数日、そう思うことが多くなっていた。

もうひとつ、聖一が心配していた下半身の変化。それが思ったほどでもないのだ。水着姿の自分を目の当たりにして、気持ちも高ぶり、たしかに勃起している

感覚はあるのだが、ぴったりとした水着の布を押し上げる様子もなく、それは、股の間に納まっていた。

水着がこんなに似合っていることをうれしく思いながらも、聖一はなにか腑に落ちない感じを抱いた。

その時だった。

胸苦しさと頭痛が聖一を襲った。聖一は思わず胸を押さえ体を折り曲げた。

美容院へ行き、服を選ぶ楽しさにまぎれ気になしてい

なかったが、そういえば今朝から、偏頭痛がつづいていた……。

そう思いながら、聖一は氣を失った。

聖一が正氣を取り戻したのは、その店の奥の倉庫兼事務室でだった。

気がつくと、香奈とマヌカンが心配そうにのぞき込んでいた。商品がうず高く積まれた一角のソファの上

に、聖一は水着のまま、寝かされていた。

「あたし……」

聖一が言うと、香奈は五分ほど気を失っていたのだと説明した。

しばらくそこで休んだ後、着てきた服に着替え、香奈の車で帰路についた。

車の中でも、家に帰ってからも、聖一の頭痛と胸のムカムカは続いていた。そのことを訴えると、香奈は

「ちよつと診察してみようか」と言つた。

「あら、聖子さん、すてきな髪型。よく似合つてらつしやるわ」

香奈に連れられて能登谷形成クリニックの診察室へ入つていくと、そこにいた婦長の鈴木が声をかけてきた。

女装して暮らすようになって、聖一は、郷里から来

た香奈の腹ちがいの妹として、職員たちに紹介されていた。

日常、さほど会話があるわけではないが、顔を合わせると挨拶くらいは交わした。職員たちは聖一を、引っ込み思案の内気な女性と思っているようだ。

「鈴木さんは患者さんたちの検温の時間でしょ。いいわ、私がやるから」

香奈は白衣をはおりながら、婦長を診察室から体よ

く追ひ払った。

聖一が上を脱ぐと、香奈は、その体を触診した。その手つきはあくまで職業的で、夜毎、聖一の体をはいずりまわるそれとは別人のものようだった。

「後ろを向いて」

言われるままに椅子を回して背中を向けると、香奈は、聖一の背骨に沿って、慎重に手を動かしていった。

「少しスカートを下げるわよ」

そう言うと、香奈は聖一のスカートのジッパーを下
げ、その手を尾てい骨のあたりまでおろしていった。

「やっぱりね」

触診しながら香奈が言った。

「軟骨が出て、神経を圧迫してるわ」

「軟骨？：：そんなところなのに、頭痛がするの？」

聖一が聞くと、香奈は「服を着ていいわよ」と言っ

た後、それに答えた。

「背骨の周辺は神経が集中してるから、いろいろなところの影響が出るのよ。大したことはないけど、早めに手術してとっておいた方がいいわね」

「……手術？」

「簡単なものよ。心配しなくていいわ」

香奈は婦長にオペの準備をさせ、手術室に聖一を連れて行った。

アシストするという婦長を「今日は日曜なんだから」と言つて帰し、当直の看護婦や医師にも、さまざまな用事を言いつけ、手術室に入つてこないように手をうった後、香奈は、手術台にうつ伏せに寝た聖一に執刀した。

香奈の言葉どおり、手術はあっという間に終わった。局部麻酔された聖一もまったく痛みを感じなかった。三十分後、歩いて部屋へ戻れたほどだ。

「キズも残らないと思うわ。でも、麻酔が醒めないうちに寝た方がいいわね」

香奈はそう言って、錠剤と水の入ったコップを手渡した。

聖一は、その薬を飲み、ネグリジエに着替えてベッドに入った。すぐに睡眠薬の効き目が聖一をとらえ、意識は朦朧とした霧の中に入っていった。

その霧がやがて、もうもうと上がる黒煙に変わり、大きな爆音とともにあたり一面に広がった。

聖一は、自分の仕掛けた爆弾テロの成果を冷酷に笑って見ていた。

ざまを見ろ。これが俺をないがしろにしつづけたブルジョワどもの末路だ。

黒煙の向こうに燃え上がる赤い炎。その中でのたうちまわる人影。それはすべて女たちだ。悲鳴、そして

髪の毛や肉の焼ける臭いが立ちこめる。

ふ、豚どもが。苦しめ。醜い俺が味わってきた苦しみをお前たちも味わえ。

と、のたうちまわっていた女たちが、炎の中を抜け出し、一人、また一人と聖一の方へ近づいて来た。あるものは這いずり、あるものは焼けただれた肉をぶら下げたまま、よたよたとこちらへ来る。聖一の方を見据えたその目だけが異様にらんと輝いている。

その眼差しに、聖一は突然、たてようもないほどの恐怖を感じた。そして、逃げだそうとした。ところが、体は金縛りにあつたように動かない。

やがて、女たちは聖一の間近に迫ってくる。

「バカヤロー。来るんじゃない……」

聖一は必死に叫んだ。

汗びっしりで、聖一は目覚めた。

窓の外はもう夕刻である。

（……ということは、丸一日寝ていたということ？

それにしても変な夢を見たわ。）

聖一は、首をかしげながらベッドを抜け出し、階下に降りた。

香奈はいなかった。たぶん夜の回診に出ているのだろう。

体がだるかった。それにもまして、空腹だった。

シャワーも浴びたかったが、空腹感に耐えられず、聖一はキッチンへ入った。冷蔵庫を開け、そこにあったチーズケーキを切り分け、テーブルについた。そしてテーブルの上に置いてあった新聞を何気なく見て、口へ持っていきかけたフオークの手を止めた。

その新聞の日付は、手術を受けた日から、すでに四日を経過していた。

つまり聖一は、手術後、四日間、意識がなかったと

いうことになる。

あつけにとられながらも、大きめに切ったチーズケーキをたいらげ、聖一はバスルームに入った。

着ていたネグリジェを脱ぎ、いつもの習慣で両手を背中にかけていって、そこで聖一は、思わず笑ってしまった。

（そうだわ。手術のあとだから、ブラジャーはつけずに寝たんだったわ。）

ショーツを脱ぎ、バスタブの中に入って、シャワーのコックをひねる。ぬる目のお湯が聖一の上に降り注いだ。

聖一はボディシャンプーをとると、それを手の中で泡立て、全身を洗った。シャワーを持ち、体を流す。

まだパーマの臭いが残る髪、顔、そして肩……

そこで聖一は、愕然と手を止めた。

左肩から胸へとおろしたその手の中には、たしかに

その「重み」があつた。

そして、その手の触れている感触を、これまで感じたことがないような感じ方で、「胸」がとらえていた。

左手でシャワーを掲げ持ったままの姿勢で、聖一は静かに視線を落とした。

やはりそれは現実だった。

聖一の右手が持ち上げているのは、まぎれもない「乳房」だった。そして二の腕あたりには、左右対象に、

もう一方の乳房も揺れていた。弾力のあるその肌は、シャワーのお湯を弾き、弾かれた水滴は小さな流れになつて、ふたつの山の谷間に流れ込んでいた。

バスタブにがしやんと大きな音が響いた。左手のシヤワーが落ちたのだ。

聖一は、呆然としたままバスタブを出た。そして、体を拭こうともせず、鏡の前に立った。

上半身だけを写すその鏡の中にいるのは、どこから

見ても裸の女だった。

その乳房は、聖一の息づかいとともに大きく揺れていた。形よく上を向いたふたつの頂点には、サイコロ大のきれいなピンク色の乳首もついている。

先刻、してもいないブラジャーをはずそうとしたのは、胸にこの感覚があったからにちがいがなかった。

「でも、どうして……」

聖一は、混乱した表情で呟いた。

ただひとつわかっているのは、睡眠薬で寝ていた四日の間に、この変化が起こったということだけだった。髪や体から水をしたたらせたまま、聖一は鏡の前に立ちすくんでいた。

一時間後、聖一は香奈の私室にいた。

自分の部屋に戻り、ノースリーブのワンピースを着て、事態を整理しようと考えているうちに、香奈に対

する疑惑がむくむくと首をもたげてきたのだ。

自分の体がこんなふうになったのは、明らかにあの手術と関係がある。だとすると、香奈が聖一には何も言わず、その体に何かしたにちがいなかった。

でも、何を……。

この部屋に來ればその回答があるような気がした。

聖一は、ふだん香奈が専門書を読んだり、書類を整理したりする時使っているデスクに向かい、その引き

出しの中をさばいた。通常だと、あと三十分ほどで香奈は戻る。それまでに事態を正確に把握しておきたい。デスクの両袖の引き出しの中は、ほとんど病院関係の書類のコピーやドイツ語が並んだメモなどだった。ただひとつ、鍵のかかった引き出しがあった。

聖一は何の躊躇ちゆうちよもなく、本棚の上に置かれたオルゴールの蓋を開け、そこから鍵を取り出した。いつか、香奈が鍵をそこにしまうのを目撃したのだ。

その引き出しは、どうやら香奈のプライベートの手紙などを整理するために使っているようだった。年賀状や手紙類が整然と並べられた中に、それはあった。

牛皮で表装された日記帳だ。聖一は椅子に腰掛け、ページを開いた。

それは今年の初めから、きれいに整った字で、毎日欠かさず書きこまれていた。最初の方は、主に病院の経営に関する雑事がつづいていた。その部分を飛ばし

読みし、三月下旬までくると、そこで、一週間ほど日付がとんでいた。

そして次にこんな記述が続いていた。

三月二十八日

やっと、ある程度気持ちの整理がついた。

あの男は私をレイプしたのだ。

それを認めよう。

ここ数日、私はそれを必死に否定しようとしてきた。俊樹さんとの思い出を、あんな身も心も醜い男に汚されたくなかったから。俊樹さんが死んだとき私が誓ったこと、一生を俊樹さんの妻として過ごそうという決心を、あんな薄ぎたないテロリストに、力づくで崩されたことが許せなかったから。

でも、押し入ったあの男が、私を組み敷き、その汚れた体液を私の中にそそぎ込んだのは事実なのだ。

その事実を認めて、なおかつ俊樹さんに対する私の純血を貫くにはどうしたらよいのか。それを考えよう。

あの男に仕返しをするのだ。私が受けた陵辱と同じ仕打ちをあの男に加えてやるのだ。それが、力づくの報復をこととするテロリストに対する正当な扱いというものだ。

そういう意味では、病院のためを思っただけ、あの男をここにとどめたのは正解だった。これからじ

つくりと、罠に陥れるための用意をしよう。まだどんな方法かは見当もつかないが。

聖一は衝撃を受けながら、ページを繰った。

それから数週間、日記は聖一に対する恨み辛みでつぶられている。香奈の聖一に対する敵意は日を追うごとに大きくなってくる。そして、四月下旬、日記の記述はそのトーンを変える。

四月二三日

今日、Sへの報復の突破口が見つかり、すぐにその最初の手を打った。

そんな方法があるとは思ってもみなかった。私は、それを思い立ったとき、その考えの突飛さに、思わず声を上げて笑い出しそうになった。

Sを女にする？　　：：：そんな。あのどうしようもな

いほど造形の崩れた顔を……。

しかし、Sの肌は女のようにきれいなのだ。肌の資質そのものを変えることはできないが、顔を変えることは、私にはできる。何なら、体だって……。私はその考えに憑かれたように、Sを言いくるめ、即座にオペまでやってのけたのだ。

この日から聖一の呼び名が「あの男」から「S」に

変わっている。香奈が聖一に対して、精神的に優位に立った証拠だろう。さらに、日記はこう続く。

：
：
：
：

五月一日

今、この日記を読み返していて、ちよつと驚いた。

私はどうやら当初から、無意識のうちに、Sに対する仕打ちの方法を考えついていたようだ。

「私が受けた陵辱と同じ仕打ちをあの男に加えてやるのだ」

それはつまり、Sを女にして辱めを受けさせるということに他ならないではないか。たぶんこれは、私の潜在意識にもかなった、今後私が希望を持って生きていく上で、最良の手段なのだ。

手術後の腫れがひいたSの顔は、思った通り最良の仕上がりだ。上品でありながら淫靡な、最も男好きの

する顔になっていく。今後が楽しみだ。

：：：：：

五月一三日

今日、初めてSに女装をさせる。思っていた以上に美しく、しかもかわいい。S本人もまんざらではない様子だ。

：：：：：

五月一五日

Sは女装して初めて一人で外に出た。

まだ、帰ってこない。もしかしたら、このまま帰ってこないかも知れない。それならそれで仕方がない。

あの顔で、男として生きていくことがどれほど困難か、思い知ればいい。必ずいつかは、下司な男たちに卑しめを受けるにちがいない。しかし、できたらSには帰ってきてほしい。私の計画をもっともっと完璧なものにするために。

：
：
：
：
：

五月一六日

Sはやはり戻ってきた。

それも、女としての「見られる喜び」を存分に味わって。Sのナルシステイックな性格からすれば、そうなるだろうと確信していたとおりに。

そしてその性格を利用して、私はSに女として生活することを納得させた。

：
：
：
：
：

五月二〇日

今日から、Sの改造の第二段階に入る。性格の改造だ。

陵辱される女の辛さを本当に味わわせるためには、Sに「女の心」をもたせなければならぬ。これは困難な課題だ。私はその手段としてセックスを利用することにした。Sのような人間には、それが効果的だと

思ったからだ。案の定、Sは、私のペッティングだ
けで、女のようにむせび泣いた。

……

六月二五日

Sはますます女らしく、それに愛らしくなっていく。
私は「調教」の成果に満足しながら、ちよつと混乱さ
え起こす。Sをこのままペットとして手元に置いてお
きたいと思ったりするのだ。

しかし、Sを女にして獣たちの餌食にするという計画を変えるわけにはいかない。これは一種の革命なのだ。

そろそろ計画の第三段階に入ろう。体の改造だ。しかし、これは相当慎重にしなければならない。Sに氣どられないように一氣に、しかもすぐにはもとに戻らないような方法で、女性ホルモンを投与しなければならないのだ。

：
：
：
：
：

七月二日

さがしていた薬剤の所在がわかった。以前どこかで
読んだことがある固形のホルモン剤だ。幾種類かの女
性ホルモンが高分子カプセルに閉じこめられ固められ
ている。これを体の中に埋め込むと、順次カプセルが
溶解、一年以上に渡って血液中にホルモンが供給され
る。ホルモン異常の患者のためにアメリカで開発され

たらしい。これは日本では認可されていない。危険だが、闇ルートで手に入れなければならない。

：
：
：
：

七月一六日

例の薬をSに埋め込む口実となり、しかも、Sの体をその薬をうけつけやすく変えるために、エストロゲンとゲスターゲンの合剤の投与を始める。Sには「発毛を促す薬」と言っている。女性ホルモンは確かに髪

の毛の新陳代謝を活発にするのだから、うそではない。
これでSの体は女性化しはじめると同時に、やがて副
作用があらわれるだろう。それを、オペの理由にすれ
ばいい。

：：：：：

七月二二日

今日、Sが倒れたのを機会に、オペをした。急激な
体の変化にSが動揺しないように睡眠剤を投与する。

今、私の目の前に寝ているSの臀部の皮下には、直径三・五センチのタブレットが入っている。それがSの体に純度の高いホルモンを流し込みはじめているはずだ。

四日ほどの間、Sが意識を取り戻さないよう、さらに睡眠薬を注射し、体力の衰えを防ぐためブドウ糖点滴もしておくことにする。

：
：
：
：
：

七月二六日

Sの体は順調に変化している。もう、誰の力によっても後戻りはできない。問題はSが目覚めたとき、どんな態度を示すかだ。ことによると、今日がSと別れる日になるかも知れない。

日記は今日の昼間書いたらしいそのページで終わっていた。

聖一は激しい衝撃の中にいた。

自分は香奈が周到に用意した罠に、まんまとはまりこんでいたのだ。

そしてそれに気づくと同時に、聖一の中に、かつて自分が持っていた「強固な思想」が急速に蘇ってきた。

自分たちのような純粋な人間をないがしろにし、おもちやにするブルジョワ社会に鉄槌を下す。

あの女にはめられ、その思想をすっかり忘れ去って

いた自分のだらしなさに怒りが湧いてきた。

こんな服に身を包み、浮かれていた自分が恥ずかしかった。しかも、今、ブラジャーでつつまれたその胸には女の乳房までついているのだ。

くそっ、殺ってやる。

聖一は、香奈に対する激しい怒りで身震いした。

その時、聖一の背後のドアが開いた。

「……読んだのね」

聖一が振り向くと、香奈は薄笑いを浮かべて、こちらを見ていた。

淫夢の章

エレベーターに乗ろうとして、中から降りてきたアメリカ人ビジネスマンらしい男にぶつかった。聖一は、

ブルーのワンピースの裾を翻しながら、よろけてロビーにひざまづいてしまった。

体に急激な変化がある上に、一日中都内を歩きまわり疲れきっている。フロントでキーを受け取り、ぼーっとしてエレベーターを待っていたのだ。非があるのは聖一の方だった。にも関わらず、聖一の顔を見て騎士道精神に目覚めたらしいそのアメリカ人は、太い腕で聖一を抱き起こしてくれた。

「イクスキューズミー。ダイジョブ？」

返事をするかわりに、聖一は、その男につこりと微笑み返した。

この上なくタフそうなアンクルサムは、この上なく幸せそうに笑い、ドアが閉まるまで、聖一を見送ってくれた。

「……ち、馬鹿野郎」

エレベーターの中で、聖一はひとり悪態をついた。

それは、あの太平楽なアメリカ人に対してであるとともに、思わず可愛らしく微笑んでみせたりした自分に對するものでもあった。

自分の部屋に戻った聖一は、バスタブにお湯を溜めながら、いまいましげに、石鹸で顔の化粧を落とした。

「いつまでこんな墮落した生活が続けてるんだ、俺は」
ワンピースを脱ぎながら、聖一はひとりごちた。

スリップを脱ぎ、ブラジャーとショーツをとって、

バスに入る。

体を沈めると、ふたつの乳房が浮力を受けてゆたゆたと揺れた。聖一はその感覚にいよいよ憂鬱な気分になった。

右の臀部に埋め込まれたその薬剤は、確実に聖一の体に女性ホルモンを送りつづけているらしい。乳房は日増しに大きくなっていた。香奈のところを飛び出したときには、まだ思春期後期の少女くらいだったのが、

今では、成熟した女のそれに変わりつつある。

「くそつたれ」

聖一は一週間前の屈辱感を思い出して言った。

「読んだのね」

聖一が香奈の日記を読み終わったとき、帰ってきた香奈は部屋の入り口に立ち、薄笑いを浮かべていた。

椅子から立ち上がった聖一は、香奈を見返し、最初

は小さな声で言った。

「この女^{アマ}……」

そして、同じ言葉を、次には大声で叫んでいた。

「このアマ！」

と同時に、聖一は香奈に向かって飛びかかった。

香奈はすぐに身を翻し逃げようとしたが、一瞬早く、

聖一は香奈の腕をつかみ、部屋の中に引きずり倒した。

「なにをするのよ！」

香奈は倒れた床からすかさず半身を起こして言った。

「てめえこそ、……お、俺に何をした」

聖一は香奈の襟首をつかみ、力まかせにもう一度床に押しつけた。途中、口ごもったのは、この間女言葉に慣れ、言葉がすんなり出てこなかったからだ。

「読んだんでしょ、私の日記を。そのとおりのことをしたのよ」

香奈は聖一を見上げ、平然と言った。

その表情を見て、さらに怒りがつのった聖一は、香奈の上半身を持ち上げ、また、床に向かって打ちつけた。

「よくもぬけぬけと。俺の体をこんなにしやがって」
香奈は後頭部をしたたか打ったが、すぐ鼻で笑って、
言い返してきた。

「およしなさい。そんな態度はもう聖子には似合わない

いわよ。あんなに女になるのをうれしがっていたくせに」

「るせえ！」

聖一は、香奈の襟首を締めあげた。

「俺の体をもとに戻せ」

「それはできない相談ね。あの薬、体に入ってしばらくすると数万個のマイクロカプセルが散らばるのよ。

今ごろは、あなたの細胞の隙間に入って、溶ける順番

がくるのを待ってるわ。取り出すことなんて、もう誰にもできない」

「……くそっ」

聖一は、さらに襟にかけた手に力を入れた。香奈は苦しそうな表情をしながらも、つづけた。

「それによく考えてごらんなさい。最初に私の体を傷つけたのはあなたの方なのよ」

「そうか、それなら俺にも考えがある」

聖一は締めあげている手を持ちかえると、右手で香奈のスカートをたくし上げ、乱暴にショーツを引き抜いた。

「なにするの」

「もう一度、おまえの体をめっちゃめっちゃにしてやるんだ」

聖一は、今度は自分のスカートをまくり上げ、ショーツを脱いだ。

そして、香奈の太股をむりやり開かせると、そこへ自分のものを力づくで突き立てようと……

「……！」

突然、聖一を不安が襲った。

何度香奈を突き貫こうとしても、それができないのだ。

勃起している感覚はある。なのに聖一のペニスは、小さくぐにやりとしたまま、香奈のその部分にあた

るとむなしく折れ曲がってしまふ。

「ふ、ふ、ふふふ……」

香奈は組み敷かれたまま笑いだした。最初はふくみ笑いで、そして、最後には大声で笑いながらこう言つたのだ。

「ごらんなさい。あなたはもう男じゃないのよ」

「く……くそつたれっ」

香奈の言葉に逆上した聖一は、香奈の首めがけて飛

びかかっていた。

馬乗りになり、両手で首を締める。

今度こそ香奈は、苦しそうに手足をばたつかせても
がいた。

「死ねっ」

聖一は両手の指に力を込めた。

その瞬間、香奈の体が痙攣し、やがてぐったりと力が抜けた。

聖一は肩で息をしながら立ち上がると、動かなくなつた香奈を見おろした。

どのくらいそうしていただろう。

やがて冷静さを取り戻した聖一は、今、自分の置かれている立場の危険性に気がついた。これは、すぐにもこの場を離れなければならない状況だ。

聖一はクローゼットを開け、そこから香奈がいつも使っているショルダーバッグを探した。その中に財布

と車のキーがあるのを確かめ、肩にかけた。

しかし、聖一が急いで部屋を出かかったとき、思わぬことが起こった。

すでに死んだと思った香奈がかすかに動き、小さくうめき声をあげたのだ。

一瞬、聖一はどうしたものかと迷った。もう一度香奈の首を締め、完全に殺しておいた方がいいかも知れない。

しかし、すぐにその考えが誤りであることに気がついた。

香奈は生かしておいても、聖一のこととは絶対にしゃべらないだろう。逆に香奈が死体で発見される方が聖一にとっては危険だ。この家には、いたるところに聖一の指紋が残されている。

聖一は、もう香奈を振り向きもせず、家を飛び出していた。

駐車場に停めてあった香奈の車に乗り、幸い、病院の人間には誰にも目撃されずにそこを離れた。

しかし、病院の敷地を抜け、林道へ出たところで、一台のおんぼろカローラが停まっているのが見えた。

警視庁の大河内の車だ。

聖一はできるだけ平然とした顔でハンドルを握り、その車の脇を通り過ぎた。車の中では大河内の蛇のような目がこちらを凝視していた。

ホテルの冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、聖一はぞんざいな仕草でテレビのスイッチを入れた。

タオルを首にかけて上半身は裸のまま。下半身には今日買ってきたトランクスをはいている。股を大きく開いてベッドに腰かけ、ビールを飲む。一人でいるときくらいは、できるかぎり男として振る舞いたいと思っただ。

しかし、その意に反して、聖一の胸は大きく揺れていた。窓にはそのなんとも様にならない姿が映っていた。聖一は、窓と自分の胸を見ないようにしながら、今後のことを考えた。

組織へ連絡をとろうと、何日間も東京近辺を歩きまわってみた。しかし、それはすべて徒労に終わった。あとは大阪、名古屋、広島などにあるアジトをたずねることだけだが、東京と同様、あてにはならなかった。

すでに警察の手が入っている可能性が高い。

どうしたものか……

考えながら聖一は、なんとはなしにテレビを見ていた。

テレビは、富山県と岐阜県の県境の山中で、死後二ヶ月ほど経過した女性の腐乱死体が発見されたというニュースを伝えていた。発見現場の映像に重なって、アナウンサーが警察の発表を読み上げた。死体には身

元がわかるような所持品がなかったこと、死因は不明だが、他殺、自殺、道に迷った末の餓死という三つの線から捜査が進められていることなどがその内容だった。画面は、泥だらけの衣服と、唯一の所持品だったロザリオを映し出した。

そこで聖一の目は画面に釘付けになった。その真鍮製のロザリオとブラウスの柄に、確かに見覚えがあったのだ。

それはまちがいなく、聖一や冷泉れいぜいとともにA国外務大臣殺害のテロに加わった平林ひろみのものだった。

以前、三人で作戦計画を練っているとき、そのブラウスの胸にロザリオを見つけた聖一が「革命家に十字架はいらないだろ」とからかったことがある。その時、ひろみは「これは両親の形見だから」というようなことを言った。

あの死体はまちがいなくひろみのものだ。とすると

：

聖一にもひろみの死因はわからなかったが、富山と岐阜の県境付近という場所に思い当たるものがあつた。

発見現場から二〇キロとは離れていない富山県側の山中の廃村に、世界同時革命軍のゲリラ戦訓練のためのアジトがあるのだ。聖一も以前そこで、何度か武闘訓練をしたことがある。

同志は、あそこに潜んでいるのだ。

聖一はそう確信した。

翌早朝、ホテルをチェックアウトした聖一は、東京駅から新幹線に乗り、八時半にはすでに名古屋にいた。

そこで高山行きの特急に乗り換え、十一時少し前に高山に着く。ここからさらに鈍行に乗らなければなら
ない。

その待ち時間に、聖一は町へ出て、買い物をした。

聖一はその時、香奈の家を飛び出したままのワンピース姿だった。いくらなんでもこのなりのまま、仲間のところへ合流するわけにはいかなかった。

駅前のビルにジーンズショップを見つけ、そこで、数枚のTシャツと二本のパンツ、それにスニーカーを買った。

ここで聖一にはちよつとショッピングなことがあつ

た。ジーンズが体に合わないのだ。ウエストで選ぶとヒップが入らない。ヒップに合わせるとウエストが余る。男物ばかりを選ぼうとする聖一を怪訝そうにながめていた店員が、ついにはしびれを切らせレディス仕様のを持ち出した。胸ばかりでなく、体全体が女性化している証拠だった。

駅のトイレでジーンズとトレーナーに着替え、女物の下着もワンピースもパンプスもすべてごみ箱に捨て

た。髪の毛も切っておきたかったが、すでに床屋に寄る時間もなく、後ろにまとめ、先刻車中で食べた駅弁のひもで縛った。

鈍行列車が目的の小さな町の駅に着いたのは、二時近い時刻だった。

そこからバスに一時間ゆられ、山間の寒村に着く。谷川の両側に細い道があり、いまだに藁葺きの農家が数軒、だんだん畑とともに、急斜面の山肌へばりつ

いている。そんな村だ。

その谷川沿いの道を、さらに上流に三〇分ほど歩くと、目立たない林道がある。その急な道を登り始めた聖一は、数十メートルも行かないうちに、枯れ草混じりの柔らかい地面の上に、まだそう古くはない車の轍を見つけた。

急勾配の山道を四時間近く休みもせずに登ったの

は、暗くなる前に目的の村まで着きたかったからだ。こんな道で夜を迎えたら、ひろみと同じ運命になる。

新品のスニーカーのせいで足にまめをつくりながらも、聖一は必死に登った。そのおかげで日没直後のまだ空の明るいうちに、その村に到着した。

藁葺き屋根は下の谷川の村と変わらないが、ここはさらに荒れていた。もう何年も前から人に捨てられた村である。

聖一は、八軒ほどある朽ちた農家の中で、いちばん奥にある最も大きな家を目指していた。合掌づくりふうの藁屋根がふたつ。小さい方は、納屋だ。その納屋の脇に、4WDのバンが停まっているのが見えた。母屋には、ランプの灯らしきものもちらちらしている。

聖一は、足を引きずりながら急いだ。

途中の道も周辺も、廃村らしく夏草が生い茂っていたが、母屋の前にある庭は草が刈られ、縁側から奥の

座敷が見えた。その火のついていない囲炉裏端には、数人のなつかしい顔があった。

庭を入ってきた聖一に、最初に気づいたのは、書記長の賀茂だった。

「誰だ？」

賀茂は、聖一にというより、仲間たちに聞かせるために言った。

その声に、そこにいたメンバーたちの緊張した視線

が、聖一に集中した。

その中には、委員長の大乗寺の他、副委員長の戸塚、それにテロ訓練の責任者だった諏訪や、中央執行委員の都築、橋爪、手島もいた。冷泉^{れいぜい}の顔は聖一の位置からは見えなかった。

「俺です」

聖一は答えた。

「……？」

縁側まで出てきた賀茂は、訝しげな鋭い視線を向けてこちらを見ていた。

他の仲間たちも、すぐに行動を起こせるように中腰の体勢で、構えていた。

「てしがわら勅使河原です。賀茂さん」

「……えっ？」

賀茂が、一瞬、ほうけたような顔になり、そのあと、何か恐ろしいものでも見るように聖一を凝視した。姿

はともかく、その声に聞き覚えがあるからにちがいはなかった。

他のメンバーも、驚きの眼差しで立ち上がり、声もなく縁側まで出てきた。

聖一は、まるで、自分が幽霊にでもなったような気がした。

「居場所がやっとわかり、逃走先より帰還しました。今日から合流します」

聖一の言葉に、メンバーたちはまだしばらく無言のまま呆然としていたが、やがて委員長の大乗寺が口を開いた。

「テシ……？ 整形……したのか？」

その夜は、聖一が無事に生還した祝いの酒盛りとなった。

その席で、聖一は、香奈の家に隠れるようになった

いきさつや、顔を整形し、女装してカムフラージュしていたこと、ひろみの死体の発見場所からここがわかったことなどの経緯を話した。

もちろん、女装していたもうひとつの理由——香奈との関係のことや、今、自分の体の女性化が進んでいくことなどは、話さなかったのだが。

不精髭を生やし、かつてより痩せた感じのするメンバーたちは、聖一の話に興味深げに聞き、話の節目ご

とに、湯呑みに注いだ地酒の焼酎を飲んだ。

聖一は、これでまた仲間たちと革命運動に邁進できることに心を弾ませていたが、その場の雰囲気にくらか違和感を感じていたのも事実だった。

以前、同志たちが集まるとあった身が引き締まるような緊張感が欠けているのだ。大乘寺を中心に、強固な命令系統を持つ軍事組織としての形態は揺らいでいないようだ。大乘寺が口を開くと全員がその言葉に傾

聴し、その目配せひとつでメンバーたちは動いていた。しかし、その動きにどこか鈍重なところがあり、態度や言葉にはびくついているようなところがあった。

冷泉の存在も気になった。

最初、冷泉が顔を見せなかったこともあって、ここにはいないのだと聖一は思っていた。ところが、座敷に入ると冷泉はひとり静かに座っていた。しかし、その存在感がまるで希薄なのだ。仲間たちが酒盛りの用

意をしている最中も、そして酒盛りが始まってからも、ただ無表情にそこに座っているだけ。聖一が「おまえも無事だったんだな」と言った時も、ひろみのことを聞いた時も、ただ「……ああ」と言ったきり、それ以上言葉を継ごうとしない。なにか遠くを見ているような目つきで、聖一さえ目に入ってはいないようだった。

もうひとつ違和感を感じた原因は、冷泉以外の全員の自分を見る視線だ。なぜか、のぞき見るようにこち

らの顔を見る。しかし、聖一が見返すと、困ったような表情で視線を泳がせるのだ。

聖一はこれから始まるここでの生活に、正体のはつきりしない、生理的と言ってもいいような不安を感じていた。

一週間がたち、二週間が過ぎる間に、仲間たちの暮らしぶりがわかってきた。それをひとことと言ってし

まえば、何もしていないのだ。午前中、遅い時間まで寝ていて、起きると三々五々飯を食い、午後から夜までは酒を飲み、そして寝る。そんな暮らしぶりだった。時々大乘寺が、周辺の偵察や、麓の町への買い出しを命じたときだけ、行動を起こす。それ以外は、ただのんびんだらりと生活していた。

情勢から考えて、まだ次の作戦はとれないまでも、武闘訓練くらいはしているだろうと思っていた聖一の

考えは完全にあてはずれだった。

生活資金は、何人かの支援者から送られてくるカンパでまかなわれていた。誰かが買い出しに山を降りるとき、銀行口座に振り込まれたその金を持ち帰るのだ。メンバーたちは、その金をただ食いつぶしているだけだった。

そのメンバーたちに対して、大乘寺は絶対権力者として振る舞っていた。それも、以前のように思想的権

威として、みんなが従うというよりも、威圧し、全員を服従させている感じだった。

聖一は、それにいささか失望したが、情勢が厳しい今の時期だけのことだろうと考えた。そして、その心の支えになっていたのが冷泉の行動だった。

相変わらず冷泉は寡黙だったが、他のメンバーとはちがって、毎日、母屋のとなりにある納屋にこもって、ひたすら爆弾をつくっていた。

それは次のゲリラ活動に対する備えにちがいがなかったし、そんな冷泉に対しては大乗寺も何も言わなかった。

そんな中で、聖一はけっこう毎日忙しかった。以前は誰がやっていたのかは知らないが、全員の食事の支度や、衣類の洗濯などが聖一の仕事になった。他のメンバーはみんな三十代なかごろなのに対し、二十代は聖一と冷泉だけ。日常の雑事は、必然的に若い聖一が

するということになるのだ。

しかし聖一がそんな仕事に精を出したのには、もうひとつ理由があつた。最初の日に感じた仲間の視線に對する不安。それが日に日に大きくなつてきて、それを忘れたいがために、体を動かしていたかつたのだ。

それは、たとえばこんなことだつた。

薄暗い土間の台所で、かまどに薪をくべ、料理を作っている、背中に誰かの強い視線を感じる。

入浴中、誰かに見られているような気がして、木戸をかすかに開けて、外を確かめたことも何度かある。

まわりだけでなく、自分自身にしてもおかしかった。

仲間たちが寝起きする部屋に入ると、以前は感じることのなかった男臭さに、息ができないほどになるのだ。

夜など、一人で抜け出し、納戸部屋に寝たことも何度かある。

そんな夏の終わりのある日、聖一は納屋の裏にある井戸の端で、仲間たちの衣類の洗濯をしていた。自分も含め九人の男の衣類である。しかも、電気も水道も通じていない廃村だ。洗濯機などあるはずもなく、洗って干すまでに、毎日二時間半は優にかかった。

その日、大量の下着やズボンをやっとしぼりあげ、竹簍に入れて聖一が立ち上がったとき、空に稲光が走った。

そういえば、さっきラジオで台風が近づいていると言っていた……

雷鳴とともにざわざわと鳴りだした山音を聞きながら、聖一が、空を見上げていると、いきなり、大粒の雨がその額にあたった。

と感ずるが早い、一瞬後には聖一は篠つく雨におおわれていた。

それは、納屋も母屋も何も見えなくさせるほどの雨

だった。

せつかくしぼった洗濯ものが……

聖一は、走りだした。

鋭い閃光とともに雷鳴がすぐ近くで鳴った。その瞬間、納屋の軒下に達するという場所で、聖一はつまずいてしまった。あやうく転びはしなかったが、洗濯ものが地面に落ちて散乱した。聖一はあわてそれを拾い集めようとした。

と、聖一の視野に太い男の腕があらわれ、衣類を拾いあげた。びつくりして顔を上げると、大乘寺だった。洗濯をしている最中、山の方へ歩いていくのが見えたから、彼も途中で降られ、あわてて戻って来たにちがいない。

大乘寺が手伝ってくれたおかげで、洗濯ものは、すぐもとの簞の中に納まった。二人は雨の中をまたすこし走り、低く突き出した納屋の軒下にたどりついた。

雨はまだ、轟音と喋っていいような音を立て、降りつづけていた。

ふう、また洗いなおさなきや……。

聖一はそう思いながら、泥で汚れた洗濯ものを見ていた。後ろで縛っていた髪がいつのまにかほどけ、その先から水がぽたぽたと箆の中に落ちた。何本かの髪の毛は首筋に張りついている。

不意に、体全体が凍るような異様な気配を感じた。

聖一が顔を上げると、横に立った大乘寺が聖一を見おろしていた。異様な気配の正体は、大乘寺の視線だった。

大乘寺は、聖一の顔を見ているのではなかった。顔よりすこし下、胸のあたりにぎらぎらした眼差しを向けているのだ。聖一はおそろおそろその視線をたどって、自分の胸を見た。

濡れた大きめのTシャツが、体に張りついていた。

その布は乳房の形のままに体の線を浮かび上がらせていた。ふたつの膨らみの頂点には、つんと立った乳首すら、はっきりと見て取れた。見られていると思ったとたん、聖一の意に反して、乳首はさらに勃起した。

ふたたび顔を上げると、大乘寺は、今度は聖一の顔を見ていた。一瞬、その目に獣じみた翳りが走った。

踏み出す大乘寺より一步早く、箆を放り出した聖一は雨の中に飛び出していた。ぬかるみを必死に走る。

しかし、数歩走ったところで、大股で追ってきた大乘寺に肩をつかまれ、引き倒された。聖一は泥の中に横倒しになった。その上に、聖一の倍はあろうかと思われる大乘寺の体が被いかぶさってきた。

大乘寺はすぐさま聖一のＴシャツをまくり上げると、その乳房にむしゃぶりついた。髭の生えた顔をこすりつけるようにして、唇を乳房に這わせ、乳首を吸った。

聖一は必死に抵抗したが、大乘寺の力にはかなわなかった。

相変わらず豪雨が降りつづいていた。たとえ叫び声を上げても、母屋には届くはずもない。

聖一は泥水に体を半分沈ませながら、なすすべもなく大乘寺に^{なぶ}撈られつづけた。

大乘寺は乳房ばかりでなく、聖一の上半身のあらゆる部分に唇を這わせた。

やがて、聖一を乱暴にうつむかせると、荒い息づかいをその背中に浴びせながら、手を聖一の体の下にまわし、ジーンズのジッパーを降ろした。ジーンズとブリーフを手荒くずりさげる。

「大乘寺さん、やめて……ください」

濁流となって泥水が流れていく地面から、必死に顔をもたげて聖一は叫んだが、雨の音にかき消され、声は大乘寺にすらとどいていないようだった。

聖一の下半身に激痛が走った。

力任せにその大きな体をぶつけてくる大乘寺の動きに、聖一は自分の体がバラバラにこわれてしまうのではないかという恐怖を感じた。しかし、その豪雨の中で、口の中には泥が紛れ込み、聖一は、息を継ぐのがやっとだった。

大乘寺が、なんとも表現しがたいような叫び声をあげた。と同時に、聖一の体の深い部分に、どくどくと、

それが注ぎ込まれる感覚があった。

聖一の頬を雨とはちがう熱い液体がつたつた。

雨は、降りだしたのと同じように唐突にやんだ。

泥に顔をつっこみ、裸の尻をもちあげた惨めな格好の聖一の上から立ちあがった大乘寺は、びしょびしょのズボンをあげながら、見おろしていた。

聖一は、恐怖と屈辱感から身動きすらできず、ぼんやりと納屋の方を見た。

その納屋の小窓から、冷泉が悲しげな顔でこちらを見ていた。

その夜は嵐だった。

風にぎしぎしと揺れる古い農家の風呂場で、聖一は一番風呂に入っていた。

いつもは大乗寺が最初に使うのだが、風呂を焚いた聖一自身が、誰にもことわらず、まず入ったのだ。小

さなランプの灯ひとつの、今にも朽ちそうな薄暗い風
呂場の中で、聖一は湯船に身を沈めていた。

今日のことをすべてを洗い流したかった。忘れられる
ものなら忘れたかった。

しかし、いやが上にもそれを思い出させるように、
傷ついたその部分は、湯の熱さの中でじんじんうずい
ていた。

と、風の音の中、驚くほど近いところで、大乘寺の

声がした。

「おい、ひろみが置いていった荷物を持ってこい」

風呂場の前の廊下で誰かに命じているようだった。

しばらくして、突然、入り口の木戸が開き、大乘寺が入ってきた。

湯船を出ようとしていた聖一は、思わず胸を両手で押さえて、またしやがみこんだ。大乘寺に対しては、今は、恐怖感しかなかった。

「今日から、これを着ろ」

大乘寺はそう言うのと、風呂場の床に、赤いスーツケースを乱暴に置いた。

そして、聖一の予想に反して、聖一が用意した着替えのTシャツとジーンズをとって、そのまま出て行った。

風呂から上がった聖一がそのスーツケースを開けると、そこには女物の下着や衣類が入っていた。さつき

の大乗寺の言葉からして、たぶんひろみのものだろう。それらは、けっして上等とは言えないものだだったが、きれいに洗濯はされていた。

床に尻をついて座った聖一は、その衣類をしばらく見ていたが、やがて、その中から一枚のブラジャーを取り出した。思いきってそれに腕を通してみる。背中のホックをとめると、そのカップはあつらえたように聖一の乳房を包み込み、しっかりと固定した。

屈辱感と不安に揺れていた聖一の心は、そのブラジヤーのおかげで、不思議と落ちついていくような気がした。

綿の白いブラウスとえんじ色のミデイのスカート姿で座敷にあらわれた聖一を見て、車座に座って酒を飲んでいたメンバーたちは、一瞬、息を飲んだ。

「テシ、ここへ来い」

大乘寺は、自分の右隣をあけさせ、聖一を手招いた。恥ずかしさにうつむきながら、そこに座った聖一とは対象的に、大乘寺はなぜか上機嫌だった。

いつもならあぐらをかいて座るのだが、スカートをはいた聖一は、そこに正座していた。それでも大柄な大乘寺の肩の方が聖一より高い位置にあった。

左手に焼酎の湯呑みを持った大乘寺は、右手を聖一の肩にかけて言った。

「ひろみが姿を消して以来、下の町へは俺たちが交代で行っていた。しかし、いくら小さな田舎町だとは言え、官憲に手配写真がまわっている人間が銀行などに出入りするのは、極めて危険だ」

話しながら、大乘寺は手を前にまわし、第一ボタンのはずれたブラウスの衿からその中にさし入れてきた。

「そこでだ。今後は、テシに女の格好をして行っても

らうことにする。この姿ならバレることもないだろう」
大乘寺の手は、ブラジャーの中にすべりこみ、聖一の乳房をもてあそんだ。指にまで剛毛がびつしりと生えたその手のざらざらした感触が、乳房の柔らかい肌を通して聖一を屈辱感の中で責めさいなんだ。

全員の視線が大乘寺の手の動きに集中していた。大乘寺はそれをじゅうぶんに承知の上で、乳首をつまんだりした。

「……あ」

それまでこらえていた聖一だったが、思わず小さな声をもらしていた。

メンバーたちが、生唾を飲み込むのがわかった。全員が狂っていた。

「みんな、異存はないな」

大乘寺は全員を見まわして言った。

じつは聖一を新たな任務につかせることなどどうで

もいいのだ。大乘寺は何より、「これは俺の女だ」と宣言しているのだった。

嵐は、ますますその激しさを増していた。

修羅しゅらの章

「山の樹もだいぶ紅葉してきたな。道理で風も冷たいはずだ」

ハンドルを握った賀茂が、運転席のウインドーを上げた。

「テシ、おまえ、そのなりで寒くないのか？」

助手席の聖一の胸のあたりを横目で見やりながらそう言ったあと、賀茂は口の端をひきつったようにあげて、ヒヒツと笑い声を立てた。

聖一は賀茂を無視して窓の外を見ていたが、それでも気になって、綿のブラウスの衿もとをかき合わせて

いた。

4WDのバンは、林道を抜け、谷川の村へとさしかかっていった。

アスファルトで簡易舗装された、車がやっと一台通れるくらいの道。そのへりから五メートルほど下の川には、岩にへばりついた苔の模様まではつきりわかるほど透明な水が流れている。水面には、上流で落ちたのだろう、すっかり色づいたモミジの葉が、二枚三枚

と、緩急をつけながら漂っていく。

山側の段々畑では、二人の年老いた農夫が腰を曲げて鍬を振るっていた。

「ひろみの残していった服なんて、そんなに多くないんだろう。今日、下の町へ降りたついでに秋ものでも買ったらどうだ。どうせみんなで食いつぶすだけの金だ。テシが色っぽく着飾ってくれりや、こっちも目の保養になるってもんだ。納戸部屋に毎日干してるとこ

を見ると、ブラジャーとかパンティとかだつて、数が足りないんだろうが」

賀茂は、例の口の端を歪めるようにやにや笑いで、聖一の顔をちらちらとうかがつた。

聖一はただ黙つて、その屈辱に耐えていた。

「それに、その化粧。いくら目立たないようにつたつて、ちよつと地味すぎるんじゃないか。ひつつめ髪に薄化粧なんて、まるでオールドミスの教師だぜ。もつ

と赤い口紅でも買ってさ。その方が大乗寺さんだつて喜ぶぜ」

賀茂はまた、語尾をヒヒという声で結んだ。そして、ギヤを切り替えたついででもいうように、その手を聖一のスカートの上に置いた。ペーズリー模様の薄い生地を通して、賀茂の脂ぎった掌の感触が、聖一の太股につたわった。

「もしよかったら、その口紅をつけて、今日アジトへ

帰る前に、俺のもくわえてくれよ。ちよつとぐらい遅れたって、誰も気にしやしないさ。なんなら、帰りといわず、今からだっていいんだぜ。そのへんの森ん中へ、車停めてさ」

賀茂の手はもぞもぞと動き、スカートをたくし上げはじめた。

「賀茂さん、やめてください」

聖一は無視しきれなくなつて言った。聖一の言葉に

かまわず、賀茂は薄笑いを浮かべたまま、その手をまくれ上がったスカートの下へまわし、内腿にさし入れてきた。

「賀茂さん！」

聖一は、強い語調で言い、体をよじるようにしてその手をはずそうとした。

「いいじゃないか。減るもんじやないんだし」

「俺は男ですよ」

聖一はスカートを降ろそうとするが、賀茂の太い腕がそれを邪魔する。

「ほう、そうか。じゃ、毎晩、大乘寺の寢床でよがり声あげてるのは、どこの女なんだろうな」

聖一は唇を噛んだ。

賀茂の手が内腿を這い上がってきた。聖一は、しかたなしに押し殺した声で言った。

「賀茂さん、大乘寺さんのことでそんな言い方、しな

い方が身のためなんじゃないですか」

その言葉に、賀茂はしぶしぶ手を引っこめた。

「ふ、恐い恐い。お前は大乗寺委員長の『女』だからな。お前の一言で、書記長の俺だって、いっぺんに反革命の裏切り者ってわけか」

聖一は身を守るためだとは言え、大乗寺の名を持ち出さなければならぬ自分自身のふがいなさを呪った。

そして、夜毎、大乘寺の寝間で繰り広げられる光景をまざまざと思い出し、さらに深い屈辱感の中に沈みこんでいった。たとえば、昨夜……

「おう、テシ、やっと来たか」

浴衣姿でふすまをあけた聖一を見上げ、天井から吊るされたランプの下で胡座をかいた大乘寺は言った。

風呂あがりに浴衣を着ることも、そして、この部屋

へやってくることも、すべて大乘寺からの命令である。
「そんなところにつつ立ってないで、早く布団を敷けよ」
後ろ手にふすまを閉めた聖一は、無表情のまま、言
われたとおりにその薄い布団を、すり切れた畳の上に
のべた。

大乘寺は布団の真ん中にどっかりと座ると、あごを
しやくって、聖一を招いた。

「さあ、寝ろ。俺が脱がしてやる」

背を向けて横になった聖一の体を、大乗寺は浴衣の上から撫でまわした。

「いい体だ。これがあの醜男だった勅使河原てしがわらだとは思えんな」

聖一之首筋に顔を寄せ、耳の後ろの髪が生え際を唇でなぞる。

「色っぽいうなじだぜ」

大乗寺が衿のあわせにその手を差し入れてきた。

「……あ」

大乘寺のごつごつした掌が、たわわに実った聖一の乳房を揉む。

聖一は目をつむり必死にこらえているが、どうしても口の端が歪んでしまう。大乘寺は、首筋に唇を這わせながら、そんな聖一の顔を楽しんでいる。

「どうだ、気持ちいいか」

聖一は耳をなめてくる大乘寺から、できるだけ顔を

背けようとした。

「ふ、まるで処女だ。本当はお前だつてして欲しくてたまらんのだろうが」

大乘寺はそう言うと、強い力で聖一を仰向けにして胸のあわせをはだけた。

その下から白い二つの乳房が現れる。大乘寺はにやりと笑って、その乳房にむしやぶりついた。

弾力のある肌の上を唇でこね回し、嘗め、そして、

乳首を吸う。

聖一は声が出そうになるのを必死にこらえている。

大乘寺は帯に手をかけると、聖一の浴衣の前を完全にはだけた。

大乘寺の不精髭が、乳房から、やがて聖一の全身を這いまわりだした。

わきの下、腹、腰骨のあたり、そして内腿、……。

「……、ああ……」

聖一の口からかすかに声が漏れる。頭の上に伸ばした両方の手がシーツを握りしめている。

「そうか。やっぱりそんなに欲しいのか」

ふたたび聖一の乳房をなめまわしていた大乘寺は、体を起こしてそう言うと、突然、聖一の髪の毛をつかんだ。

その手に力を込めて引っ張る。

「痛……」

聖一は顔を歪めて上半身を起こした。

「ほら、お前の欲しがってるのはこれだろ」

大乘寺は自分のものを引っ張り出すと、聖一の頭を、いきり立つそれに押しつけていった。

聖一は顔を背け、抵抗を試みる。

しかし大乘寺はさらに強く髪を握り、聖一の口をペニススの先に持っていく。

「なにしてるんだ。早くくわえんか」

聖一はしかたなくそれを口に含んだ。

「ちゃんと両手で持てよ」

大乘寺の言葉に、聖一は両手を添え、その根元を握る。

大乘寺のペニスはさらに太く怒張し、聖一の唇を痛くなるほど開かせる。

「舌を使え」

聖一は舌の先で亀頭の裏側をなめた。

「そうだ、なかなかうまいじゃないか」

大乘寺はそう言うと、突然腰を浮かして聖一の喉にそれを突き上げてきた。

「……うっ」

大乘寺の手で頭を押さえられたままその一撃を受け、聖一は吐きそうになって、渾身の力で首をはね上げた。

と、口からペニスがはずれた。

「馬鹿野郎。真面目にやらんか！」

その途端、聖一の体は後ろにのけぞり、畳の上に飛ばされていた。

大乘寺が髪をつかんで後ろに引き倒したせいだ。

畳に肩をしたたか打ちつけた聖一は、つい、恨みのこもった暗い目で大乘寺を見てしまった。

「なんだその目つきは。何か文句があるのか」

大乘寺は、いきなり聖一の上に馬乗りになった。そ

して、その頬を何度も張った。視線が殺意じみたものに変わっている。

「大乘寺さん、やめてください。許して……」

そのごつい腕で何度も殴られ、聖一は意識を失いそうになりながら、必死に懇願した。

しばらく殴り続けた後、大乘寺はやおら手を止め、聖一を見おろした。聖一は、おびえきった眼差しで大乘寺を見上げている。

「……ふ、可愛い奴だ」

大乘寺は、すでに肩があらわになっていた聖一の浴衣を完全に体から剥ぎ取り、聖一を腹ばいにさせる。

そして、ショーツも脱がせると、その上に被いかぶさった。

「ああっ……」

秘部にめり込んでくる強烈な痛みにも、聖一はもはや抵抗することもできず、声をあげた。

なぜ、こんなことになってしまったのか。

眼下に民家が見えはじめた峠道を走るバンの車窓で、聖一は考えていた。

女として肉体を弄ばれている聖一のみでなく、メンバーたちはみんな大乘寺の強大な力の前に抑え込まれていた。

かつては革命の理想の下に結集していたはずの組織

が、政治権力に追いつめられ、今や目的を見失って、ただ大乘寺の強烈なカリスマ性に従うだけの集団と化しているのだ。

そして、その大乘寺は、集団の中で独裁的な権力を持つことだけを自己目的化しているように見えた。

もちろん、そんな大乘寺に反感を抱くメンバーがいないわけではない。大乘寺の前では従順な忠誠心を装っている賀茂でさえも、その監視下を離れれば、先刻

のように、多少なりとも敵意を表すのだ。

しかし、その反感が、反乱にまで至らない「関係」ができあがっていた。

じつは、大乘寺に真っ向から挑んだ者もいる。

二週間ほど前だった。中執の都築が大乘寺に反論したことがある。生活資金となる支援カンパを送金してくるシンパの中に、右翼の大物がいることを知ったからだ。

「なぜ敵から金をもらう」

それが都築の言い分だった。

それに対して大乘寺は「敵の力を利用することも革命の戦術であり、暴力により既成の権力の転覆を狙うという一点で、彼らは敵の中で最もわれわれに近い存在なのだ」と強弁した。

そして、反論する都築を「反革命分子」となじった。

その都築は、今、アジトの奥まった部屋に半死半生

のまま寝ている。大乘寺の命で、賀茂をはじめとするメンバーたちが「総括」という名の制裁を加えた結果である。

要するに、みんなが狂っていた。

聖一はそんな狂気の中で、打算的ではあるにしろ、自分だけはまだ狂気から免れている気がしていた。

大乘寺の「女」であるうちは、自分が都築のような目に合うことはないと、どこかで計算しているのだから

ら。

「なあ、テシ。そこらじゅうに手配写真が貼ってある俺たちとちがつて、顔も姿も変えてしまったお前だったら、山を降りて娑婆へ逃げることもできるだろうに。なんでそうしないんだ」

銀行の架空口座から「闘争資金」をおろして車に乗り込んだ聖一に対して、賀茂が先刻とはちがった真面

目な調子で聞いてきた。

「逃げる？　だって俺たち、革命するために集まってるじゃないんですか」

聖一が逆に問うと、賀茂は何も言わずにハンドルをきった。

聖一は賀茂の顔をうかがったが、濃いサングラスの下が目がどんな表情をしているのかよくわからなかった。

バンは田舎町の狭い坂道を縫い、スーパーマーケットの駐車場へ入った。

ハムや野菜など、比較的値段が安くて日持ちのするものを見つくりつつ、手押しカートに入れていく。九人が一週間食いつなぐための食料である。

レジで支払を済ませて袋につめると、大袋四つ分になった。聖一ひとりで持つには多すぎるほどの量であった。

る。かと言って、賀茂を呼ぶわけにもいかない。

聖一は、両手に二つずつの袋を持って、指がちぎれるのではないかと思いながらマーケットを出ようと
し、そこでちよつと足をとめた。

レジの外に洋品店があつたのだ。

と言つても、田舎のマーケットの軒を借りる洋品店である。廉価な普段着中心に、赤ん坊のよだれかけから小学生用の体操服、実用本意の男女下着までがごち

や混ぜに置いてあるような店だ。

聖一は、セルロイドのマネキンが着たニットのワンピースに見入っていた。

先刻、賀茂が「服でも買ったら」と言っていたせいだ。

その服を見ているうち、聖一は、香奈の家で一着十何万もするような贅沢なドレスを着て過ごした日々のことを思い出していた。

ほんの二ヶ月ほど前のことなのに、遙か昔のことの
ような気がした。

いったんは、あの時の自分こそ狂っていたのだと思
ったが、今の自分とくらべて、はたしてどちらが狂っ
ているのか。少なくともあの時は、わくわくするよう
な甘酸っぱい毎日と、心の平安があつた。

袋が食い込む指の痛みに我に帰って、聖一はそんな
思いを振り払い、出口に急いだ。

出口のガラスドアを体で開け、外に出たところで、今度はびくりとして、聖一は歩を止めた。ほんの数メートル前に立っていた思いがけない人物を見て、足がすくんだのだ。

大河内刑事だった。

一瞬の後、先方もこちらに気づき、驚いたようなそぶりを見せた。

もう、逃げ出すわけにはいかなかった。

「これはこれは。能登谷先生の妹さんじゃないですか」
大河内はそう言いながら近づいてきた。

「しかし、面白い所でお目にかかりますな。最近、病院にいらつしやらないと思つたら、こんな所に来てらつしやつたんですか」

聖一は、警戒し、必死に頭を回転させた。うまい口実を考えなければならぬ。

「え：：、ええ。学生時代からの友人が、この近くで

陶芸作家になっているものですから。勉強も兼ねてちよつと手伝いをさせてもらつてるんですの」

「ほお……」

「……こ、これ、友人の工房の人たちの食料なんです」
大河内が聖一の持つ袋に目を向けたので、聖一はあわててつけ加えた。

「なるほど、たいへんですな」

「それにしても、刑事さんこそ、どうしてこんな所

に？」

「いえね。女房の実家がこっちなんですよ。私、あんまりにも捜査方針からはずれたことばかりしてるんで例の事件から外されましたね。それで、ちよつと休暇をとったんです。家族揃って女房の家へ遊びにきてるようなわけで」

「そうなんですの。でも、奇遇ですわね」

聖一は、大河内の言葉を信用できないと思った。

どこでどう足どりをつかんだかは知らないが、自分を追って来たのだということもじゅうぶんに考えられた。こんな田舎町で偶然に会うなど、あまりにもできすぎている。

「重そうですね。お手伝いしましょうか？」

大河内が言った。

「いえ、けっこうです」

「そうですか？　あなたみたいにお美しい方が、そん

なふうにしてらっしやると、なんだかお気の毒で」

「そんなことありませんわ。好きでやってることですもの。それじゃあ、あたし、急ぎますので」

そそくさとその場を離れようとする聖一の後ろから、大河内が声をかけた。

「また、お会いできるといいですね」

駐車場に向かいながら聖一は、大河内のことをメンバーに報告すべきかどうか考えていた。もし、大河内

が自分を追ってきたのだとすれば、これは組織にとって極めて危険な状況だった。

しかし、下手にそのことを全員に告げるのは得策でないようにも思われた。ただでさえ集団ヒステリー状態になりはじめているメンバーが、さらに混乱し、その矛先が自分の方に向いてこないとも限らない。「組織を危険にさらした責任をとれ」ということになりかねないのだ。

とりあえず今夜、大乘寺にだけは報告しておこう。
聖一はそう考えた。

帰りの車の中で、聖一は後ろに気を配っていたが、
大河内が尾行してくる様子はなかった。

アジトへ帰りつく頃には、もうすっかりまわりは暗
くなっていた。

いつものとおり、聖一は、メンバーたちの夕食の準

備に忙しく立ち働いた。かまどに火をくべるところから始めなければいけないので、囲炉裏端に都築を除く八人分の器や皿を並べ終わった頃には、八時近くになつていた。

メンバーたちがまるで幽霊のようにのっそりと現れ、いつもどおりの食事が始まった。

大乘寺は聖一のとなりに座って、その体に片手をまわし、地酒の器を傾けながら、おかずをつまむ。時に、

ブラウスの衿の中に手を入れて、乳房を弄んだりするのだ。

他のメンバーたちは、大乗寺のそんな様子を見て見ぬふりをして黙々と食べている。ただ冷泉だけが、時折聖一の方を見て、悲しそうな表情をするのだった。

食事が半ばほど過ぎた頃だったか。

突然、賀茂が持っていた茶碗をがちゃんと音のするように床に置いた。

「大乘寺さん、ちよつと言いたいことがあります」

その言葉に、全員が賀茂の方を見た。

「なんだ」

大乘寺が言った。

「大乘寺さん、そいつのこと、あんまり信用しない方がいいですよ」

賀茂は、聖一を顎の先で示しながら言ったのだ。

「なんだと」

大乘寺が血相を変えて、賀茂をにらみつけた。

その鋭い眼光に、全員が緊張した。一触即発の雰囲気である。

「今日、町で面白いものを見ましてね。マーケットの駐車場で、煙草をきらして買いに出てみると、テシが、ある人物と話していたんですよ。誰だと思います？」

賀茂は、冷たさを漂わせた冷静な口調で言った。にらみつけていた大乘寺も、賀茂の次の言葉を待ってい

る。

「公安の大河内ですよ」

賀茂はゆつくりと言った。

「えっ」

大乘寺をはじめ、メンバーたち全員が声をあげた。

「ちよっと待って。それは……」

聖一は急いで反論しようとした。

「黙れ」

それを制するように賀茂がどなった。

「大乘寺さん、その男女、公安のスパイですよ」

「賀茂さん、ちがうんだ……」

「お前は黙ってろ」

今度言ったのは大乘寺だった。その言葉と同時に、聖一の体にまわしていた大乘寺の腕が聖一の肩を動けないようにつかみ、もう一方の手が聖一の口を押さえた。聖一は必死にもがいたが、大乘寺にしっかりと抱え

込まれ、すでにどうすることもできなくなっていた。

「賀茂、つづけろ」

「俺は、そいつの現れ方からして怪しいと思っていたんですよ。そいつは、整形外科の医者に手術してもらって、女にばけたと言っていました。が、国家レベルの犯罪人を、そんなふうにしてかくまう医者がどこの世界にいますか。よほど大金でも積みば別でしょうが、そういうわけじゃないんだ。俺が思うに、た

ぶんそいつは、事件の後、公安につかまっただすよ。公安はそれを公表せずに、手術でそいつを女に変えた。たぶん取り引きですよ。女になってしまえば、そいつは一生罪に問われず、世間の目をごまかせる。公安だって、主犯の勅使河原は行方不明だとかたづけることもできる。公安との間にそんな約束ができて、そのかわり、そいつは仲間を売ったんだ」

聖一を抑え込んでいる大乘寺の手がわなわなと震え

た。

「そいつは、われわれを探り当て、頃を見計らって公安に連絡する。そして、大河内がやって来る。そういう手はずになっていたんだ。それ以外、考えられないじゃないですか。もしかしたら、その取引以外に、もっと深い約束ができていたのかも知れない。肉体的な、ね。つまり、そいつは大河内あたりにやられて、すっかり淫乱女に成り下がってしまったんだ。そいつ、町

へ出たりするとすっかり女が板についてるんですよ。

これが以前のテシだとは想像もできないくらいに。たぶん、公安の奴らにやられまくって、精神まで女にされてしまった。もう革命なんてどうでもいい。大河内さんの言うことならなんでも聞くから、もっとして：
：なんてね」

賀茂は、完全に大乘寺を煽っていた。

大乘寺は、嫉妬に狂った眼差しで、おびえる聖一を

見返していた。

「吊るせ」

大乘寺が命ずると、賀茂たちが、納屋の梁にかけた縄を引いた。

全裸に剥かれ、藁の上に転がされていた聖一の体が、宙に持ち上がる。乳房から腰にかけてぐるぐると巻かれた縄が体に喰い込んだ。

梁にかけられた縄は、後ろ手に縛られたあたりに結ばれているので、聖一は、空中で海老のように折れ曲がって揺れた。爪先を伸ばせば床につきそうなのだが、そうしようとして上半身を起こすと、バランスを失い無理がかかって、先刻からすでに殴られ続けている体が、きりきりと痛むのだ。

「吐け！」

大乘寺がいきなり聖一の頬を、逆手で張った。

聖一の体が宙で回転した。

まわりを取り囲んだメンバーたちは、ぎらぎらした目で、それを見ている。

回転が停まると、ねじれた縄が元に戻って、今度は聖一の体を逆に回した。

「大乘寺さん……俺は……何も……」

聖一は苦しそうに言った。

「まだ言うか」

また大乘寺は聖一に一撃を喰わせる。

聖一の口の中に胃液がこみ上げてきた。先刻食べたものなど、とうに吐いてしまっていた。

「強情なやつめ」

口を半開きにし、うつろな目で宙を見た聖一をながめ、大乘寺が言った。

これだけ痛めつけられているにも関わらず、聖一の顔と肉体はまだ美しさを保っていた。いや、乱れて首

筋に張りついた髪や、縄の喰い込んだ乳房、それになかばほうけたようなその顔が、かえって妖艶さを放っているのだった。それを見て、メンバーたちが欲情していることはまちがいはなかった。

「大乘寺さん」

賀茂が言った。

「淫乱女には淫乱女なりのやり方があるんじゃないですか」

「そうだな。まかせる。やってみろ」

賀茂は、にやにや笑いながら、聖一の正面に立ち、
やおら、自分のズボンのベルトを抜いた。

それを鞭替わりにして、聖一の体を五六度打ちつける。
る。

聖一は、その痛みにのけぞりながら揺れた。

「みんな、見てみろよ。あんなに小さいくせに、こいつ前を立ててやがるぜ」

賀茂はそう言いながらズボンをおろしていた。

「そうか。そんなに気持ちがいいのか。じゃあ、もつと気持ちいいことをさせてやる」

賀茂は聖一の頭をつかむと、ぐいと下へさげた。

聖一の顔の前で、賀茂のものがいきり立って上下に揺れていた。

「賀茂さん……堪忍……して」

聖一は、メンバーの前でそんなことをさせられる羞

恥に耐えられず、言った。

「お前、泣いてるのか。泣くほど欲しいってわけだな。
さあ、喰らえ」

片手で聖一の顎を無理矢理開かせると、賀茂はそれを聖一の口にねじ込んだ。

「齒を立てたら、殺すぞ」

そう言いながら、賀茂は聖一の頭を前後に揺らし、それに合わせて、自分の腰を突き出した。

聖一は何度も息を詰まらせ、目を白黒させながらも、一縷の望みをつないで、大乘寺の姿を探した。

しかし、大乘寺はただ笑って見ているだけだった。
「お前らも、好きにしていゐぞ」

賀茂が言った。

と、メンバーたちが聖一のまわりに集まってきた。
諏訪は、すぐさま前のものを出し、くの字に曲がった聖一の腰をつかんで、親指で秘部を押し開きながら、

挿入してきた。

戸塚は、聖一の体の下に入り込み、縄からはみ出した乳房を食いつくように吸っていた。手島は、聖一の背中に唇を這わせていた。

長い間女を絶たれ、閉塞状態の中に押し込められていたメンバーたちには、もはや正気のかけらさえ残っていないなかった。

その夜、深夜まで、聖一はメンバーたちにかわるが

わる蹂躪じゅうりんされ続けた。

ただ冷泉だけが、納屋のすみで、うつむいて何かに耐えているようだった。

●「公開版」はここまでです。

◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。

◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。

◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。

◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

テロル・イン・パープル

Teror In Purple

<公開版>

CopyRight 1991 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500